
東方神主伝

ごくでヴある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方神主伝

【Nコード】

N8778T

【作者名】

ごくでヴある

【あらすじ】

博麗の長い歴史では神主となった人間は一人しかいない。

この話では、その神主を主役とした話で進展していく。

プロローグ？（前書き）

というわけで、プロローグ？から始まります。

ちなみに、プロローグ？は本編とはまったく関係を持ちません。

プロローグ？

博麗神社に仕える人々。

その人たちの役目は、妖怪の異変解決をし……博麗大結界を守ること。

そんな長い歴史を持つ中でも、博麗神社に仕えた男は一人しかいない。

この話は……そんな男の話を記したものである。

どうなるかは……知らね。

「おい！最後投げやりじゃねえか」
どこからか男の声がしてきた。

「うるせえ、いいから戻れ」

そんな男の声を聞いて会場に立っていた男はその男を蹴りだした。

「ぐはっ……」

「この話じゃ、多少同じオリキャラを使うことがあるが……気にするな」

そういうと、男は会場から消えてしまった。

プロローグ？（後書き）

今回の二人は両方オリキャラです。

僕の作品を見ている方はわかるかもしれませんが。

・・・ちなみに、キャラ設定などは話が進んでから載せるつもりです。

プロローグ(前書き)

こっちが本当のプロローグです。

プロローグ

森の奥・・・人間たちは寄り付かないところに、一人の赤ん坊がいた。

この森は妖怪の餌場でもあるのだから、人間の処分所には適した場所だろう。

しかし、赤ん坊というのは珍しかった。

赤ん坊を捨てていく人は限りなく0に近いのだから。

赤ん坊が何らかの病気だったのか・・・もしくは、赤ん坊が異質だったのか。

おそらくあの赤ん坊は後者の方だろう。

その赤ん坊は、木の幹の方から動こうとしない・・・しかしその赤ん坊は泣くそぶりをしていなかった。

ただ、ポーと空を見ているように見える。

おそらく赤ん坊も気づいているのだろう、自分は待っていても暴れても・・・死ぬということが。

その赤ん坊のしている姿は、赤ん坊とは思えないほど大人びていた。そんな赤ん坊の近くに足音がした。

赤ん坊は気になったのか、自分が包まれた毛布を持ってその方向を見た。

そこか現れたのは、男性が見たら10人中10人が美しいともいえる姿をした女性がいた。

赤ん坊の方は妙な気配を感じていた。

しかも・・・その女性の方から。

「・・・あらあら、なかなか変わった子みたいね」

その女性がそういうと赤ん坊は女性に抱き上げられた。

赤ん坊の方は少し驚いていたが、暖かさを感じて眠くなったのかあくびをしてすぐに寝てしまった。

「・・・本当に・・・面白そうな子ね。まるで、黒い底に落ちた夢

を現実に通いてくれるような・・・そんな気が。そうね・・・博麗
黒夢、いいかもしれないわね」
女性は目の前にスキマと呼ばれる空間を開くと、その赤ん坊を抱き
上げたままスキマの中に入っていった。
そう・・・彼女は、幻想郷の・・・とは言っても最近出来たばかり
だが、その幻想郷の創立者である、八雲紫だった。

プロローグ（後書き）

次回で多少時間が飛びます。

・・・このままでは黒夢がしゃべれないので。

おそらく黒夢が2、3歳ぐらいの時まで飛びます。

第一話 博麗黒夢

俺は、なぜか特別な力をもっていた。

そして・・・生まれた時から周りの大人たちが何を言っているのか理解ができた。

ああ、俺は捨てられるのか。

赤ん坊である俺には、力があつたが使い方はわからないので抗うこともできなかつた。

俺は俺を生んだらう、男女の大人が森の中に運んできた。

そして俺を木の近くにおいたとき、突如妖怪たちが襲いかかつてきた。

俺を両親だつたであろう男女は走って逃げ出そうとしたが、そのまま妖怪に食べられてしまった。

まあ、当然のことだろうが。

森から大量の妖気を感じた森に人間が入ったら・・・どうなるかは見なくてもわかる。

妖怪たちは男女の血が付いた口で俺に襲いかかってきた。

そのとき、俺は霊気でできた球体のようなものに包まれた。

すると、俺に噛み付こうとした妖怪の顔が消えた。

いや、霊気によって妖怪がやられたのだろう。

妖怪たちはそれを見ると一目散に逃げ出した。

・・・やっぱり、くだらない。

俺はそのとき、生きる理由を失っていた。

そんな俺に、いきり理由を与えてくれたのは・・・

「・・・あらあら、なかなか変わった子みたいね」

俺の親代わりになる、スキマ妖怪と呼ばれる八雲紫だつた。

俺はその温かさを感じて、眠くなって寝てしまった。

あれから、数年後

「黒夢、ご飯できたわよ」

紫は自分の家でエプロンをつけたまま、庭の方にいる黒夢を呼んだ。

「はい、わかった!」

黒夢はコルテスからもらった改造武器 お払い棒を使う練習をしていたのをやめて家の中に入っていった。

コルテスとは、紫の親友の幻想郷を作ったのを協力したと呼ばれる亡霊である。

そして、黒夢の親代わりをしてきている。

「いただきます!」

黒夢は誰もが見て可愛らしいと思いき笑顔をして紫が作ったご飯を食べ始めた。

紫は黒夢を育てていると、しだいに愛情が生まれたらしく本当の息子のように可愛がっている。

そんな黒夢にはとある噂が飛び交っている。

「黒夢が、そんな妖怪を蹴倒してるとかないわよね」

「僕、そんな怖いこと出来ないよ。にぱー」

そんなふう言っている黒夢だが、紫には言えない秘密がある。それは……

「ぐはっ……」

森の奥で人間の姿をした妖怪が血を吐いて倒れた。

その近くには同じく人間の姿をした妖怪がたくさん倒れていた。人間の姿になれる妖怪はかなり強い妖怪だと判断できる。

そんな妖怪たちの近くに立っていたのは5才にも満たない幼児だった。

「まったく、期待はずれだ」
手にはお払い棒を持った・・・そう、博麗黒夢だ。

彼は自分の霊力や格闘術を強くするために、妖怪を見つけると勝負を挑んでいるのである。

もちろん、口封じをして。

まあ、それは黒夢だけでは出来ないだろう。

だから、協力者がいる。

それは、

「おい、黒夢！誰があと処理すると思ってるんだ」

草むらから、時代に合わない洋服を着た顔が怖い男が出てきた。

彼はコルテス、説明したとおり黒夢の親代わりをしてる亡霊である。

「いいじゃん」

黒夢は少し頬を膨らまして可愛らしく言った。

・・・まあ、ここまで大暴れしたことを知ってるコルテスには聞かないのだが。

「いいじゃんじゃねえよ！まったく、無駄に演技が上手い」

黒夢はいつもは演技をして純粋な子供として偽っているが、実際は大人以上に黒いのである。

・・・それでも、子供っぽいところはいくつかあるのだが。

「・・・あっ、もう戻らないとお母さんに怒られるや。にばー」

黒夢はそういうと走っていった。

「おい！・・・はあ・・・まったく」

コルテスは倒れた妖怪たちを見るとため息をついた。

「・・・しょうがない、たまにはお仕置きがいるか」

「わーい、おやつだ！」

黒夢は皿にのっているクツキを食べた。
すると、

「うっ……」

黒夢は口を抑えた。

「ど、どうしたの黒夢？」

すると、黒夢は目からポロポロ涙を流し始めた。

「か……辛いよー！」

どうやら、本当に泣いているようだ。

「お、おい大丈夫か？（にやり）」

どうやら犯人はコルテスのようだ。

そう、黒夢はさすがに子供なので辛いものは大嫌いなのである。

「うっ……（父さん……後で覚えてろ）」

黒夢は泣くことしかできなかった。

第一話 博麗黒夢（後書き）

「にはー」は、ひぐらしの梨花が演技をしてる時によく言う言葉です。

黒夢も言ってみたいですね。

スしてるのに少し子供っぽいのが幼少時代の黒夢の特徴です。

第二話 vs 天狗

森の中、鈍い音が聞こえた。

それは妖怪が殴られた音だった。

そして妖怪達が倒れた近くに立っていたのは・・・博麗黒夢だった。

これは黒夢の習慣となっている妖怪狩りである。

これで数回痛い目にあっているのだが、それはまた別の話で話そう。

「・・・ふう」

黒夢は倒れた妖怪たちの近くに座り込んだ。

そのとき、茂みの方で音がした。

「！」

黒夢は改造したお払い棒の下からとげを出した。

そして、お払い棒に靈気をまとわせると槍の形にして音のした方に投げつけた。

すると、刺さるような音が聞こえ

「あうっ！？」

という驚いた声が聞こえた。

どうやら刺さらなかったようだ。

「・・・ははっ」

黒夢は少し笑うと音のした方向に向かった。

そこには、

「あ、危ないじゃないですか！」

書くものを持った天狗が地面に座り込んでいた。

そのすぐ近くには、黒夢が投げたお払い棒が刺さっていた。

見た目は黒夢より10歳ほど年上の感じだった。

・・・まあ、妖怪だからおそらく3、400歳ぐらいだろう。

黒夢は天狗がいったことを無視して地面に刺さっているお払い棒を抜いた。

そして、お払い棒で天狗に殴りかかった。

「!?!」

すると、天狗は自分の体に渦を巻いた風をまとわせて黒夢の攻撃を
はじいた。

おそろく、それでさっきの黒夢の攻撃もはじいたのだろう。

「へえ、やるね!」

黒夢は風の勢いで飛ばされたので空中にいた。

黒夢はすばやく天狗のいた方を見たが、そこに天狗はいなかった。

「人間にしては恐ろしく強いですが、まだまだですよ」

黒夢の後ろには、さっきの天狗がいた。

飛ぶ早さは幻想郷にいる中でもトップクラスなのは天狗だ。

しかし、それを合わせてもこの速さは以上だった。

普通なら力の差を感じて恐怖するところだが、黒夢は笑っていた。

黒夢はこんなのを待っていたのだ、畏にはめて倒されたり、500
を超える妖怪から勝負を挑まれたときもこんな気持ちにはならな
かった。

黒夢は、純粹に喜んでいいるのだ。

一対一で、ここまで戦う妖怪には今まで会ったことがなかったのだ
から。

「(だからこそ、負けたくない)」

黒夢はそう思うと後ろを向いてお払い棒を振り回した。

しかし、棒のところは当たらず紙のところしか当たらない。

「無駄ですよ」

天狗が腰に下げてるかばんからうちわのような物を出したとき!

「・・・霊破槍 拡散」

天狗はそのとき、この少年の強さを自分はみくびっていたのだと
気づく。

なぜなら、自分の周りに霊気で出来たたくさんの小さな槍があつた
のだから。

おそろく、お払い棒を振り回したときに準備したのだろう。

そして、それは一斉に天狗に向かって襲い掛かっていた。

「くっ！」

天狗は手に持ったうちわのようなもので風を起こしてそれを吹き飛ばそうとした。

しかし、それをしてもまだたくさんの槍が残っていた。

そして、さらにおどろいたのはその小さな槍の破壊力である。

吹き飛ばした槍の中には、そのまま向かっていくものもあつたし吹き飛ばされたものも地面にぶつかる**と**爆発していた。

そして、その砂煙のせいで周りが見えない状況にいた。

天狗は時間差で向かってくる槍を何とかよけているが、弾が尽きればすぐに反撃できるだろう。

しかし、天狗は不思議に思っていた。

「（私の周りをこれで囲んで一斉に撃てば、私でもよけきれずに多少は食らうはずなのに・・・なぜそれをしない？・・・まさか！）」
天狗が後ろを向いたとき、もう・・・遅かった。

なぜなら、そこには地面に着地した後周りの木から飛び出してきた黒夢がいたのだから。

「れいはそう霊破槍 滅めつ」

手に靈気をまとわせたお払い棒を持った黒夢はそのまま天狗の背中に強烈な一撃を食らわせた。

「が・・・ああ!？」

そして、天狗に追撃と言う様に残った小さな靈気で作った槍が襲い掛かった。

そして、それが直撃し爆発した。

天狗は煙に包まれた。

「か・・・勝った?」

地面に着地した黒夢は息切れしながらそうつぶやいた。

さすがに戦いで靈気を使いすぎたのだろう、かなり体力を消費していた。

黒夢が一息ついたそのとき!

煙は突然風で吹き飛んだ。

そして、少し口から血を流し服が少しぼろぼろになっているさっきの天狗がいた。

彼女の周りには、その身を守るかのように風が吹き荒れていた。

「・・・あと少し防御が遅れていたら・・・やられていたかもしれませんね」

天狗の方も息切れしていた。

見た目では天狗の方が不利に見えるが、実際のところ逆である。

黒夢にはもう、一発分の攻撃を放つぐらいの霊気しか残されていないのである。

「・・・へえ、思った以上に出来るね」

黒夢はそれでも平静を保っていた。

取り乱しても現実が変わることはないのだから。

「・・・末恐ろしい子供ですね。将来は有望ですよ」

天狗の方もかなりのダメージを追っているのみ事実なので多少はつらそうだ。

「じゃあ・・・!」

黒夢は霊気で作った槍を天狗の後ろに投げつけた。

すると、その後ろからは叫び声が聞こえた。

どうやら、意識を取り戻した妖怪が彼女を利用しようと傷つけようとしたらしい。

黒夢が少し前に倒した妖怪は『傷つけた相手を操る程度の能力』を持っていた。

そのせいで、黒夢はさっきまで500匹の妖怪に囲まれて集中砲火を受けていたのである。

しかし、500人も操るとなるとかなりの体力を消費する。

黒夢は全員の動きが鈍いことに気づくと、『霊破槍 拡散』を使い全滅させたのである。

ちなみにあの妖怪の能力は傷つけた相手が気絶すると同時に解除される。

その後の後遺症もないようだ。

まあ、このことは後日知ることになるのだが……

「くう……」

黒夢は地面にひざを着いた。

そして、天狗はひざを着いた黒夢に近づいてきた。

「（……ここまでかな……）」

しかし、その行動は黒夢の予想を超えた行動だった。

天狗は黒夢を抱きかかえたのである。

「……なんで、お前を襲った人間を助けようとするんだ……？」

黒夢がそういうのを聞くと天狗は笑い出した。

「あははははっ！ まったくあなたは……私を助けてくれた人をほおって行くほど私は非道ではありませんよ、それに私は人間が嫌いではないのですよ」

天狗のいったことを聞くと黒夢は驚いた顔をしていた。

それは年にあつた表情だった。

「貴方もそういう顔をするんですね。博麗黒夢さん」

天狗は微笑んでそういった。

「……名前は？」

黒夢は天狗に聞いた。

「私ですか？ 私は、射命丸文というものです」

「……文」

黒夢はそうつぶやいた後、文に抱っこされてまま寝た。

その寝顔は、さっきまで大暴れしていた風には見えない子供らしい寝顔だった。

後日、

「こんの、あほんだらがあ！ー！」

コルテス・・・俺の父さんは森の奥でそう怒鳴った。

「まあまあ、落ち着いてくださいよコルテスさん」

その隣で文が父さんをなだめてくれていた。

「・・・今回は悪かったと思う。何も父さんに言わずに、あんなところに行つて」

実はあの妖怪には手紙で呼び出されていた。

それは、文も同じだったらしいが。

俺のほうには、来ないとお前の両親を殺す。・・・と。

文の方は、いいスクープがある。・・・と。

俺はあの二人は殺せないと思つたが迷惑はかけたくないので行つた。文の方は面白そうだからという理由で。（妖怪というものは想像以上に気まぐれだった）

「ていうかな、今回の件は文！お前にも原因があるからな」

父さんはそれから俺達を一时间ほど叱つた。

・・・ていうか話をした。

俺達はとてつもなく泣きたくなつた。

・・・話的な意味で。

もう父さんの言うことには逆らわないようにしようと思つた。

後日知つたことだが、文は天魔と呼ばれる妖怪の山のトップの補佐役とその子供の大天狗の世話をしているらしい。

第二話 VS 天狗（後書き）

注意！黒夢は3歳児です。

・・・本当に3歳児でしょうか・・・これ？

ちなみに、その後文は黒夢の特訓相手になります。

天魔と大天狗は後日黒夢が会います。

コルテスや紫は幻想郷中の強い妖怪たちとはかわりを持っています。

第三話 病気

森の奥

そこでは、黒夢がお払い棒での戦闘訓練を個人で行っていた。

いつもは文に手伝ってもらっているのだが、今回は忙しくてこれなかつたらしい。

しかし、個人で訓練するにはやはり限界がある。

「はあ・・・はあ・・・」

黒夢はいくら強くても、体力はそこらの3歳児とあまり大差はない。いつも走ったりしているとはいえ、それはすぐにつくものではない。それに、黒夢は大体の攻撃を靈気で行っている。

靈気は人間の生命エネルギーのようなもの。

それを多量に出すことは普通なら出来ないことである。

黒夢はそれを生まれつきに所有しているので使える。

が、やはり黒夢でも長時間使うのには限度がある。

「・・・やっぱり、その対処法も考えないとなあ」

黒夢はそういつといつも着ている脇のでている神主服（紫作成）の裾から一枚のお札のようなものを出してきた。

黒夢が最初に目をつけたのは、ある一冊の本だった。

それは、陰陽師についての本だった。

陰陽師はお札を使って妖怪を封じ込めたりすることが出来るらしい。それを見て黒夢はひらめいた。

妖怪を封じ込めることが出来るなら、おそらく靈気などを使用しているのだろう。

ならば・・・封じ込める札ではなく、技の発動キーとして使えるのではないか・・・と。

札に靈気を一つの技に使う分だけ蓄え、それに使えば・・・黒夢はそう考えるとすぐに作業に取り組んだ。

そして、何百回と失敗した中でできたのがこの一枚だけだった。

だが、この一枚の成功で黒夢にある確信が生まれた。

それは、確実に靈気を使う技ならば・・・札一枚で一回分は使えることが出来る・・・と。

黒夢は今まで、一枚の札で複数回技を使えるもの作ろうとしてたが・・・それは間違いだった。

なぜなら、札一枚では複数回の使用に耐えることは出来ないからだ。おそらく、一回使用しただけで札は役目を終えて消えてしまうだろう。

だから黒夢は、その札をたくさん作ることでいくらかの技の分だけ枚数を用意することが出来る。

しかし、技の札を作るのは正直、デリケートな作業を要する。

それに、靈気を蓄えて作り続けても・・・一日に数枚ほどしか作れない。

黒夢はその問題点を解消するために今、考えているのである。

「・・・どうすれば」

黒夢は懐に抱えていた陰陽師の本を開いた。

そしてしばらく読み進めると、気になる記述を見つけた。

陰陽師のお札には妖怪を封じるためのさまざまな紋様や呪文を記載した・

「・・・これだ！」

黒夢はこの記述を見てあることを思いついた。

それは、魔法使いが呪文を唱えて魔法を唱えるように札に自分の技を呪文のようなものにしてそれを札に書き入れて使う。

靈気をこめて毎回作るよりはまだ簡単な方法だろう。

使うときには少々の靈気を使い、呪文のように技名を唱えれば・・・多少威力は落ちても長時間戦うことが出来る。

「よし、今すぐ・・・ッ！」

黒夢が立ち上がったとき、少しめまいがした。

しかし、今はそんなことを気にしている暇はない。

「早く・・・家に戻るう・・・」

札を作る材料の一式はコルテスにそろえてもらっている。だから、家に帰ればすぐに作成することが出来るだろう。と、そのとき

「おお、うまそうながキがいるじゃねえか」

「早く食つちまおうぜえ！」

黒夢の周りを十数匹の妖怪が囲んだ。

「・・・俺のことを知らないなんて・・・（そういえば、文に情報操作してもらって知られないようにしてたっけ）・・・」

黒夢は腰にさしていたお払い棒を抜いて構えた。

しかし、再びめまいが黒夢を襲った。

「ッ！」

その隙をついて妖怪たちが黒夢に向かって襲い掛かってきた。

黒夢は一瞬でめまいを振り切って向かってきた一匹の妖怪をお払い棒でたたき飛ばした。

しかし、背後にまた別の妖怪が襲い掛かってきていた。

黒夢は横に移動してよけようとした。

だが、まためまいが起きてこけてしまった。

妖怪のつめは黒夢の腕をかすった。

「ッ！・・・」

黒夢はすぐに立ち上がるうとしたが、思うように力が出なかった。

「（なんで・・・いつもならこんな連中・・・）！」

黒夢が少し考え事をしている間に妖怪のごぶしが黒夢の体に向かってきていた。

「（しまった！）」

黒夢はお払い棒で防ごうと、殴られる前にごぶしをお払い棒で受け止めた。

だが、勢いで後ろの木まで飛ばされて激突した。

「があ！？」

黒夢の口から少量だが血が出てきた。

「おいおい、手加減しろよ。せつかくの生きのいい飯が死んじまう

だろ」

「死なない程度にしたさ」

妖怪たちはその場でけらけらと笑い出した。

「(ちっ・・・こんなところで使いたくなかったが・・・)」

黒夢は懐から札を出した。

そして、

「霊破槍 散」

すると、札が青色に光り黒夢の背後に大量の霊気で作られた槍が出てきた。

そして、一斉にその槍が妖怪たちに襲い掛かった。

妖怪たちは次々に槍に刺さり地面にひれ伏していく。

しかし、数匹残ってしまった。

「(でも・・・しばらくは動けないダメージを負ったはず)早く・・・逃げないと」

黒夢は顔が赤く、頭がボーとする状態で妖怪たちから離れていった。

どのくらい走り続けたか分からない。

だが、あたりはもう真っ暗になっていた。

夜は妖怪たちがさかんに動き出す・・・早く家に戻らないと妖怪に食べられてしまうだろう。

しかし、黒夢はもう走ることができないほど頭がくらくらして顔をさらに赤くなっていた。

黒夢は自己分析で自分がどんな状態になっているのか理解していた。

「・・・熱だ・・・ね・・・こんな・・・時に・・・」

そのとき、草むらで音がした。

「くっ……もっ……」

黒夢はふらふらしながらお払い棒を構えて立ち上がった。

しかし、そこにはあのときの妖怪の姿はいなかった。

そこには……中華風の服を着た、赤色の髪をした女性が立っていた。

「……誰だ」

黒夢は熱で意識がおぼつかなくても、いつもの様子でその女性に話しかけた。

顔が赤くなっているので効果はないかもしれないが、しないよりはマシだと判断したのだろう。

「ちよつとあなた！大丈夫ですか？こんなに顔が赤くなって。腕に怪我もしてますね」

するとその女性は黒夢の額に手を当てた。

「ひゃあ!？」

黒夢は彼女に触れられていきなり冷たさを感じたのか、少し驚いた。しかし、それより驚いたのは……熱を引いてるとはいえ、警戒している黒夢が対応しないうちにおでこに触れたことだ。

「うわっ、すごい熱じゃありませんか！とりあえず、早く貴方の家に……」

その女性は次の言葉を言うのをやめて、近くの石を拾って後ろの茂みに投げつけた。

すると、そこからはうめき声が聞こえた。

「……ま……さか……追っ手が……」

黒夢はそうつぶやいた。

すると、草むらから100を超える妖怪たちが出てきた。

「……少し、待っていてくださいね」

そういうとその女性は妖怪たちのほうへ向かった。

その女性は格闘術だけで100を超える妖怪たちを次々に倒していった。

しかも一撃で。

黒夢は今までそんなことを出来る妖怪を見たことはなかった。そして十数秒もしたら、もうその場にいた妖怪は全て地に伏せていた。

「……まさ……か……」

黒夢は限界だったらしく、そこで意識を失った。

そして地面に倒れそうになったが、その前にその女性が黒夢を受け止めた。

「……早く、連れて行かないと」

そのとき、草むらから誰かが出てきた。

「……ん……?」

黒夢が目を覚ますと、そこは自分の家だった。

「あ、やっと目を覚ましたわね! まったく、心配させて」

黒夢が寝ている布団の隣には紫が座っていた。

「……母さん」

「彼女とコルテスが見つけてなかったらやばかったわね」

黒夢は上半身を起こすと、リビングの方にあのとときの女性とコルテスが座っていた。

「目が覚めたようですね、熱も下がったみたいですし。……それよ
り」

女性は黒夢に近づき、

「あなたがあの紫の子供だなんて、正直驚いたわ」

黒夢はこの女性のことを知っていた……いや、話で聞いたの思い出していた。

「えっと……紅美鈴さんですよね」

「あ、知ってたんですか」

すると、女性・・・美鈴は微笑んだ。

そして紫の方を向いて、

「紫、少し席をはずしてもらっていいですか？」

「ええ、かまわないわ。今から人里にご飯の材料を買ってこようと思っていたし」

紫はそういうと買い物籠とお金を持つとスキマを開いてその中に入っていた。

「さて、これで演技をする必要はありませんね」

美鈴がそういうと黒夢は口を開いた。

「何で俺は、助かったんだ」

「それは」

美鈴は昨日の夜の話始めた。

草むらから出てきたのは、

「・・・コルテスさん」

美鈴はそうつぶやくと警戒を解いた。

「・・・よかった、黒夢は無事なようだな」

そういうとコルテスは黒夢を抱き上げた。

「とりあえず、紫の家まで連れて行く。お前もついてくるか？」

コルテスがそういうと、美鈴はうなづいた。

「というわけでコルテスさんが、貴方をここまで連れて帰って治療をしたわけです」

美鈴が話した後に黒夢は顔をうつむいていた。

そして、いつもの黒夢じゃいわない言葉を言った。

「・・・ごめん、迷惑をかけて」

黒夢がそういうと二人は笑い出した。

「家族のことを助けない奴がどこにいるんだ？」

コルテスは黒夢のところに来てしゃがむと黒夢の頭をなでた。

「お前はな、紫がお前を拾ったときから・・・俺達の家族なんだよ」

コルテスがそういうと、黒夢はうれしそうに笑った。

「ありがとう、みんな」

それは純粹な・・・めったに見せない演技じゃない笑顔だった。

後日、

体調が回復した黒夢は美鈴の修行を受けていた。

その修行とは、格闘術の修行である。

前に格闘術が一番強い知り合いつて誰？と黒夢が言ったとき。

そのとき名にでたのは紅美鈴だった。

彼女の格闘術はあの二人も一目置いているらしい。

なので、黒夢はそんな彼女に修行をしてもらっている。

美鈴の方も、日々強くなつていく黒夢を育てるのを楽しんでいるそうだ。

黒夢も、独自の方法で作った技の札・・・スペルカードと名づけた物をつまく使えるようになったらしい。

黒夢がもう少し成長したら、さらに使える技の種類も増えるだろう。ちなみに、なぜ美鈴があんな場所にいたかというところ

しばらく旅に出ていたが、徐々に幻想郷に戻ってきて紫に会おうとしていたのだが・・・どうやら迷子になったらしい。

そのときにたまたま、黒夢に会ったらしい。

まあ、結果往来というやつだろう。

美鈴はその後紫たちの家に一緒にすむことにしたらしい。

実際この家でもともと美鈴と紫と、後二人と住んでいた家らしい。
黒夢は、

「（その人たちにも会えるといいな）」
と考えていた。

第三話 病気（後書き）

今回は新キャラで美鈴をだしました。

そして、話が（俺的に）長くなったのでおかしいところがあったらぜひ書いてください。

第四話 能力

能力……それは、主には妖怪などの種族が所有している力である。

たとえば、紫なら境界を操る程度の能力。

コルテスなら、相手の能力を奪い取る程度の能力。

美鈴なら気を操る程度の能力……というように様々である。

しかし、いくら能力を持っていても一生気づかないこともある。

逆に力を持っていても能力があるとは限らない。

黒夢は自分が能力を持っていることに期待などしてなかった。

しかし、それが逆にきっかけになったのだらう。

彼がもともと身に宿していた能力が開花したのだ。

それは、習慣になってきていた妖怪たちとの戦いときだった。

「ぐっ……このお……くそがあ！」

やられかけていた一体の妖怪が黒夢に紫色の毒々しい液体をかけた。

それは、普通の人間ならかかっただけでそのまま体が溶けてしまう毒だった。

コルテスはそれを見ると黒夢の方に近寄った。

「おい、大丈夫か！」

コルテスは黒夢の服が解けている方の腕を見た。

しかし、

「う、うん。大丈夫」

黒夢の腕は溶けるどころかまったくの無傷だった。

「……こりゃあ」

コルテスは黒夢の腕を見て驚いていた。

数日後

「……」

黒夢は森の中を歩きながら考え事をしていた。

それはもちろん、数日前の出来事のことである。

前回考案した札を使用して技を使う・・・黒夢がスペルカードと呼んでいるものの中でも、あんな効力を与えるスペルカードは作っていない。

となると、黒夢はあることしか心当たりがなかった。

それは、

「……やっぱり、能力しかないかなあ」

黒夢はそういうと少しため息をついた。

おそらく、さらに人より異質になってしまったからだろう。

「でも、どんな能力なんだろう？」

黒夢はそれぞれ候補を出した。

その1 身近にいる人と似たような能力になる。

まずそれはないだろう。

紫たちの中で毒を無効化するなんて事は・・・できるだろうがそれは意識しないと無理だ。

その2 身近な人と真逆の能力になる。

うーん、これはわからないな。

・・・可能性にはありえるかも。

「・・・となると、おそろく」

黒夢がそういったとき、頭に何かのイメージが浮かんだ。

それは、能力を持っている中で目覚めるきっかけの一つである。

「そうか、・・・まさか干渉されなくする程度の能力とは」

黒夢はこの能力の特訓もしないとなあ。とつぶやいた後に自分の家に帰っていった。

後日、黒夢はこの能力を応用した技をいくつか生み出した。

それは、博麗の神主になった後も役立つとか。

第四話 能力（後書き）

干渉されなくする程度の能力

東方幽霊伝のガットのとは多少違ってます。

まず、常時発動のON、OFFがききます。

さらに、対象の相手から数メートルほどから干渉を封じたりも出来る。（通称 非干渉空間）

もちろん自分を対象にも出来る。

今回結構無茶振りになってしまいました。

・・・実は、能力を開花した状態で合わせたい相手が数人ぐらいいるので・・・

次はもっと力を入れて書きます！

第五話 人里の記憶

「この化物が！」

「てめえなんか人間じゃねえ！」

これは——なんだ？

「消えろ！化物が来るな！」

やめろ……

「化物」

「化物」

「「化物！」」

黒夢は布団から飛び起きた。

黒夢は汗をかいており、少し息を切らしていた。

「はぁ……はぁ……俺は、どれだけ人を恐れているんだ……」

「黒夢はそうつぶやくと、着替えるために布団から出た。黒夢は昔から・・・人が苦手だ。」

つまり、人見知りになってしまっている。

もともとあまり妖怪と人間に親密な関係になろうとしない。

それは、おそらく初対面の相手など信頼できないということだろう。美鈴は最初に会ったとき助けくれたので一応関係を持っているらしい。

そんな黒夢の様子を見た紫は、ある言葉を持ちかけた。

「あ、いつも使っている調味料がないわね。・・・黒夢、人里に買出しに行ってくれない？」

母親である紫が大好きな黒夢はそれを断ることが出来なかった。

黒夢はそのまま買い物籠をもって人里に向かった。

「（能力で大丈夫だよな。・・・よし）」

黒夢は覚悟を決めて人里に入ってしまった。

人里はたくさんの人でにぎわっていた。

その中で、黒夢は平然なふりをしながら歩いていた。

おそらく、内心ではかなり怖がっているのだろう。

黒夢はしばらく歩いて霧雨店と書かれているお店に入ってしまった。

「す、すいません」

黒夢は少し緊張した様子で店の人に話しかけた。

「ん？ああ、いらっしやい」

見たところそろそろ三十路に到達しそうな男性が一人座っていた。

そして、店の奥には温厚そうな表情をして座っている女性とそのひざに頭を乗せて寝ている黒夢と同年代に見える少女がいた。

「あの・・・母さんがいつも使ってる調味料が切れたって・・・」
黒夢は少しどもりながら言った。

「ああ、キミは紫さんのところの。まあ入りなさい」

黒夢は男性の言うままに店の奥に入ってしまった。

黒夢は座布団の上座ると出されたお茶を飲んだ。

「実はね、俺と紫さんは少し仲が良くてね。紫さんに、少し頼まれたんだよ」

そういうと、その男性は女性のひざで寝ていた女の子を黒夢の近くに置いて

「……霧雨佳奈美と友達になってくれないか？」

「……えっ？」

黒夢は少し驚いた。

母親である紫がどうしてそんなことを頼んだのか分からなかったからだ。

黒夢がそんな風に少し驚いているとき、

「……んう？」

佳奈美が目を覚ました。

そして、寝ぼけた目で黒夢を見ていた。

佳奈美は日の光に当たると少し光る金色の髪に、赤い色の目を持っていた。

寝起きの姿は年相応の姿をしていた。

黒夢はそれを見てたぶん天然なのかなという風に思っていた。

そして、頭がいつもの状態にもどると

「……はわ。こんにちわ」

と、黒夢に挨拶してきた。

「こ、こんにちわ」

黒夢はこういうことに慣れていないらしく、少しぎこちない笑顔を見せた。

そんな様子を見せた黒夢をみた佳奈美は、太陽のような笑顔を見せ。

「よろしくね！」

と元気よく言った。

「うん、よろしくね。」

黒夢は少し微笑んでそういった。

ちよつとしたおまけ

「紫さん、貴女も親ばかりですね」

「人の事いえないでしょ」

男性が言ったことにスキマに腕を乗せて紫はそういった。

「ふふ、その通りね」

「ま、紫も親ばかりなのは否定できねえよな」

その隣でコルテスと女性が笑っていた。

第五話 人里の記憶（後書き）

霧雨佳奈美

霧雨家の一人娘。

誰にでも仲良くしようとする。

かなりの天然だが、人や妖怪の気持ちに敏感。

黒夢とは表裏一体にも思えるほど性格が違う。

黒夢が演技をしているのは分かっている。

黒夢もばれている事は分かっているので佳奈美の前では演技はしていない。

というわけで、新たなキャラが登場しました。

おそらく大天狗はかなりあとの登場になると思います。

・・・名前考えないと・・・

第六話 闇との出会い

「あー・・・暇だ」

黒夢は6歳になっていた。

この位の年の子はまだ遊び足りない時期なのだが、黒夢はいつもどおり森の中を歩いていた。

いつもなら佳奈美と一緒に修行（佳奈美に修行をつけているとも見える）をしているのだが、今日は珍しく一人だった。

そんな風に歩いているとき、一匹の妖怪に出会った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？」

その妖怪は金髪で黒夢と同じ位の見た目をした少女だった。

その子は不思議そうに黒夢の方を見ていた。

黒夢の方は何かしらの違和感を感じていた。

それは黒夢の勘がいうもので、

「（・・・・・・・・ただの妖怪じゃない？どうということだ）・・・・・・・・どうしたの？」

黒夢はいつも通りの演技で妖怪に話しかけた。

「気づいたら此处にいたのだー」

その言葉を聞くと黒夢は不思議に思った。

「（気づいたら？・・・妖精じゃあるまいし、・・・じゃあ考えられる事は）名前なんていうの？」

そついうとその妖怪は、

「ルーミア、ルーミアなのだー」

そつ自分の名前を言った。

「ルーミア・・・だね。ぼくは博麗黒夢っていうの。よろしくね」
「よろしく」

黒夢はルーミアと握手した。

そのとき、黒夢はまた少し・・・変わった感じを感じた。

「・・・おなか減ってるでしょ？ぼくの家でご飯用意するよ」

黒夢はそういつて笑うとルーミアの手を引いて自分の家まで走り出した。

ちなみに、忘れ去られかけているが黒夢は人（妖怪）見知りである。
・・・つまり、

「（うわー！父さんたちが知ってるかもって家まで連れて行くのは良いけど手繋いじやったよ！やばい、鳥肌！しかも耐えないと震えそう。落ち着け、COOLになるんだ！）」
と言う風に内心では焦っているらしい。

「・・・ふふっ」

ルーミアは、少し笑った・・・歳に合わない表情で。

しばらく歩いていると、黒夢の家に着いた。
どうやら丁度紫はいないようだ。

「父さん！友達つれてきた」

黒夢は演技をしたままコルテスのほうに言った。

「あ？友達だあ？」

コルテスはそういうとルーミアの方を見た。
そして、

「っげっ」

二人同時にそういつた。

「・・・やつぱり、二人とも知り合いだったんだね」
黒夢はいつもの口調に戻っていた。

「へえ、闇の根源ともいえる妖怪だなんて」

「正確には妖怪じゃないかもしれないがな」

「コルテスの話では、ルーミアは太古から生きている妖怪でもはやルーミア以上に生きてる妖怪はいないらしい。」

「ちなみに、数回神にやられてるが何回も復活してるらしい。」

「一回目の時に既に悪しき闇などは全て人間にやってしまったから殺す理由も無いと手加減されたこともあるのだろう。」

「ちなみに少し前・・・と言っても500年ほど前にまた太陽神にやられて再生に時間がかかったらしい。」

「つまり、さつき体が直ったばかりなのである。」

「まだ本来の力ほどでは無いらしい。」

「・・・まさかこの子が紫の事は思わなかったわ」

「ルーミアはそういうとコルテスが入れた紅茶（砂糖4個＋ミルク入り）を冷まして飲んだ。」

「一方黒夢の方はコーヒーストレートで飲んでいる。」

「黒夢は辛い物は嫌いだ、苦い物はよく好んで飲んでいる。（博麗神社にいるようになると、よくお茶を飲んでるようになるのもそれが原因だろう）」

「・・・にがいの苦手みたいだな」

「黒夢がそういうとルーミアはむっとして、」

「・・・姿が子供だから味覚も子供になってるの、
そついいながら甘そうな紅茶を飲んでいた。」

「黒夢は自分の勘で、多分味覚はそのままなんだろうな。と
思っていた。」

「黒夢は気づくとルーミアに警戒心を解いていたのに多少驚いたが、」

「（ま、いっか）」

と思いそのまま一緒にコーヒーと紅茶を飲んでいた。

その様子を見ているコルテスは、

「（・・・なんか、黒夢の妹に見えるな）」

コルテスはルーミアを見てそう思っていた。

おそらく黒夢が警戒心を解いたのも、自分と似ているところがいくつかあったからだろう。

「（ま、たまには良いかもね。こんな日も）」

黒夢はそう思うとコーヒーを飲み干した。

第六話 闇との出会い（後書き）

正直少し年齢が上がっただけではあまり話は進めれない。

後数話幼少時代の話を書いたら、博麗の神主になる話を一話と異変の話などを書く予定です。

佳奈美の話もちろん書きますよ。

ちなみに俺は紅茶には砂糖を2〜4個ぐらい砂糖を入れてミルクを入れます。

自他認める甘党なんでしょうがない！

いつか糖尿病にならないか心配です。

第七話 天魔襲来

「・・・で、なんでてめえがこんなところにいるんだ」

コルテスはひざに黒夢を乗せた状態で言った。

一方、コルテスと話してる男は

「別にいいだろう、お前と俺の仲だ」

そういつて紫から出されたお茶を飲み始めた。

そんな彼は銀色の髪をして赤い目をしていた。

髪は少し長めで、肩ぐらいまではある。

そして、背中には開いたら体と同じ大きさはあるだろう羽がたたまれている。

「・・・あのなあ、天魔。俺だつて暇じゃねえんだ」

そういつてコルテスは頭をぽりぽりかいた。

コルテスのひざの上に座った黒夢は興味深げにコルテスの手を掴みながら見ていた。

・・・少し震えた様子で。

実際妖気や見た目などで怖がっているわけではないだろう、・・・まだ直らない妖怪見知りのせいなのだから。

「・・・にしても、てめえがこのがきをひざに乗せると・・・シユールだな」

正直、普通に見ても不良の10倍以上は怖い顔をした男のひざの上に10にも満たない子供が座っていたら・・・確かにシユールだろう。

「んな!?!?..てめえ、俺の気にしてることを・・・どうせ顔面凶器だよ、見ただけで逃げられるよ」

そういつてコルテスはいじけ始めた。

黒夢はコルテスの頭をなでている(コルテスは身長が190はあるので少し背伸びしながらだ)。座っていてももちろん高いから)

紫の方も、

「まあまあ、落ち着いて」

そういつてコルテスに紫が入れたお茶を出した。
コルテスは紫が入れたお茶を飲み干すと、少し気持ちを落ち着かせた。

今来ている客は、天魔 勇魔。

事実上の妖怪のトップとなっている天狗である。

彼の能力は、『何もかもを入れ替える能力』である。

考え、言葉・・・攻撃の位置さえも入れ替えることが出来る。

そんな彼はまさしく妖怪のトップにふさわしいだろう。

・・・そんな彼がなぜコルテスの家に来ているかは、数日前までさかのぼる。

黒夢が一人で歩いているとき、たまたま天魔が見つけたのである。

ちようど暇で暇でしょうがなかったので嘘と本音を入れ替えて話しかけてみた。

すると、

「どうしたんですか？」

と、黒夢は普通に天魔に話しかけていた。

天魔は一瞬本心かと思ったが、長く生きてきた妖怪としての勘が違うと言った。

となると、可能性は一つしかない・・・彼に自分の能力が効かなかった。

その理由を探すために、コルテスの家に来たらしい。

「・・・だから、それはただ単なる手前の勘違いだろ」

コルテスはそういつた。

「ああ？そんなわけないだろう」

天魔はそういつて立ち上がった。

しかし、天魔が次の言葉を言う前に紫が

「あっ・・・私、これから結界の整備に行かないといけないから・・・

・コルテス、後はよろしくね」

というと、紫はスキマの中に入っていった。

天魔は少しきよとんとしたが、すぐに

「・・・あゝあ！まだ話が済んでねえぞお！！！」

と怒ったときの口調になって足でどたどたを床にたたきつけていた。

「・・・黒夢」

コルテスが黒夢に話しかけた。

すると、

「・・・分かつてるよ、父さん」

と、黒夢が口を開いた。

天魔はそれを聞くと暴れてるのをやめた。

「・・・説明してくれるんだな」

天魔がそういうと、黒夢はこくりとうなずいた。

「あの時、天魔の能力が効かなかったのは俺の『干渉させない程度の能力』の中でも常時発動系の自分にかけているものだったんだ」それを聞いた天魔は少し驚いていた。

「・・・人間のがきがそんな能力を持つてるとはな」

天魔がそういつたとき、

「天魔様！」

空からコルテスの家の庭に文が着地した。

「文か」

「文か・・・じゃないですよ！もう会議始まつてるんですよ、早く来てください！」

文にそういわれて天魔は少し頭の中を整理した。

そして、少し経つと思いついた様子で。

「ああ、確かそんなのもあったな」

天魔がそういうと文は天魔の頭を殴った。

「あなたはいつもそうですね！いつも探し回る部下の気持ちを考えてください！」

「だからって・・・普通上司の頭殴るか？」

黒夢はそれを見て天狗の社会も大変なんだなあと思った。

「いや、その認識も少しおかしいだろ」

そんな黒夢の考えにコルテスは突っ込んだ。

しばらくすると、天魔は文にひきづられていった。

どうやら妖怪のトップである天魔も文には頭が上がりないようだ。

第七話 天魔襲来（後書き）

天魔はいつもは普通に話すが怒ると荒っぽい口調になる。
だが、根はいい人（妖怪）で部下からも信頼されている。

なんか俺が書く男キャラって、威厳もへったくれもないですね。
シリアスな話だと違うでしょうがね。

第八話 空を亡くした闇妖怪

「……ん……？」

森の中でうつむけでいた金髪の髪をした少女は目を覚ました。

その少女は回りをきよるきよると確認すると、少し・悲しい表情を見せた。

「（……またか）」

少女はそう思ってたため息をつくと言そべった状態から立ち上がった。

幻想郷の森は、通常妖怪がたくさんいて人間が入ったらすぐに食べられてしまう。

しかし、その少女は森の奥深くで寝ていた。

と、なると少女は妖怪なのだろう。

しかし、少女からはあまり妖気を感じられない。

「……はあ、またこの状態になったのか」

そういうと森の中を歩き出した。

「さて、どうしようかな」

少女（とはいっても4、5歳ぐらいの見た目なのでどっちかという
と幼女だが）はその見た目とは裏腹に大人のような冷静な声を出した。

となると、やはり長生きしている妖怪なのだろうか？

……まあ、俺がそんなことを考えても無駄なことだろうが。

……なんだよ？いつもどおりの第三者の書き方だと思ったのか。

実は、少し前に彼女を見つけて暇だったのでほったなどをつんつんしながら遊んでいたのだが……起きそうになったのでつい隠れ
てしまったのだ。

そう……俺、博麗黒夢はいまだに妖怪見知りを直しきれていない。

とはいってもなぜかあの少女は嫌な感じがしないのだが……
と、そんな風に俺が考えているとき。

「・・・ねえ、さつきから見ているの誰？」

と、少女が俺が隠れている草むらの方を見ていった。

・・・やべ、ばれたか。

俺はそう思うとため息をついた。

おそろく隠れていても無駄だろうから、俺は草むらから出て行った。

しばらくボーとしていたけど、向こうの草むらから何かぶつぶつぶやいている声が聞こえていたから、

「・・・ねえ、さつきから見ているの誰？」

と、少し声をかけてみた。

すると、そこからは・・・おそらく4、5歳ぐらいの人間の子供が出てきた。

しかし、私はそれを見ると少し違和感を感じた。

「（・・・霊気の量が人間にしては異常・・・というのもあるのだろうけど、何なのかしら？この別の違和感は）」

おそろく、あの子ども自身は気づいていないのだろう・・・霊気ではなく・・・違う何かの違和感に。

「あなた、名は？」

私がそう聞くと、その子供は隠すそぶりも見せずに、

「黒夢、博麗黒夢」

と、子供・・・黒夢は答えた。

「ところで、ここはどこ？」

と、私は黒夢に聞いた。

すると、帰ってきたのは少し意外な答えだった。

「ここは、幻想郷。忘れ去られたものが流れ着く場所だよ」
・・・幻想郷。

たしか、異質な妖怪の八雲紫が作るうとしていた人間と妖怪が共存できる場所だったけ。

・・・私がいなくなっている間に出来上がっていたなんてね。

「じゃあ、ここを作った八雲紫は今どこ？」

私がそう聞くと、黒夢はまた私の予想を覆す答えを言った。

「八雲紫・・・ああ、母さんならこの森を抜けて少し歩いた家に住んでるよ」

・・・母さん？え、嘘！あ、あれが子供を身ごもるなんて。

そんな感じで私があわてふためいていると、

「あ、一言言っておくけど。俺は母さんに赤ん坊の頃に拾われた・・・

・・・いわば養子だからね」

あ・・・そ、そうだったんだ。

そういわれると紫が人間を育てるということにあまり違和感を感じなくなつたわね。

・・・でも、見たところこのあたり一帯に結界が張られてるみたいだけど・・・これは幻想郷を外の世界と隔離するためのものみたいね。

・・・これほどの結界は、あいつ一人じゃ作れないと思うんだけどな・・・となると、龍神に力を貸してもらったのかな。

そんな風に私が一人で考えているといきなり黒夢が私の手を掴んできた。

「はあえ！？」

私らしくない・・・少し驚いた声を出してしまった。

久しぶりに自分以外と関わったせいだろうか・・・？

「ねえ、見たところ力回復してなさそうだからさ・・・少しの間でいいから、俺の家に来ない？」

いきなりそんなことを言われて驚いたけど・・・確かにそれはいいかもしれない。

正直、今の私はそこらの弱小妖怪に負けてしまいそうなほどの力が衰えている。

なら安全なところでひっそり回復するのも悪くないだろう。

「・・・ええ、いいわよ」

私がそう答えると、黒夢は少し微笑んで

「ところでさ、こつちも名前教えたんだからそつちも名前教えてよ」

「・・・名前か・・・空亡は呼ばれ名だし・・・」

「ルーミア、私の名前はルーミア」

私がそういうと、

「ルーミアだね。・・・じゃ、よろしくねルーミア」

「・・・そんな風に好意を前に出されるのは・・・4回目だった。

もう作らないと思っていたのに・・・やっぱり、無理みたい。

だから、この小さな光は・・・私が守ってあげたいと思った。

その後、黒夢の家に行ったら紫とコルテスにすごく心配された。

第八話 空を亡くした闇妖怪（後書き）

・・・この書き方はやっぱりきついですね。

ルーミアは黒夢が神主になった後に、重要な立ち位置になります。

第九話 神主誕生

「・・・母さん、俺人間と妖怪の架け橋になりたいんだ。・・・これは、人間を超えた力を持って、妖怪とは違う俺にしか出来ないことなんだ」

9歳になった黒夢は紫にそういった。

紫はそんな黒夢を見て大きくなったわね。としみじみ感じながらも少し寂しく思っていた。

「・・・そう、あなたがそう思うなら・・・好きにきなさい。私には止める権利なんてないのだから」

「・・・ありがとう、母さん」

紫の返事を聞くと黒夢はうれしそうに微笑んだ。

「でも、今の今まで本当のことを隠していたのは・・・少し癪に障るわね」

「・・・やっぱり、知ってたんだね」

紫は、黒夢が見せたがってなかった・・・自分の幼少時代に奮闘していたことを最初から知っていた。

いや、見て見ぬふりをしていたといったほうがいいだろう。

しかし、そんな黒夢を見てきたからこそ紫は・・・

「もし、つらくなったら・・・またここに帰ってきなさい。ここは、貴方の家なんだから。ていうか、少しは戻ってこないと・・・」

紫は少し脅迫まがいの事を言っている。

黒夢は軽く苦笑いをしている。

「あ・・・はははっ・・・できる限り配慮はしておくよ」

「・・・そう、ならいいわ」

紫は少し安心した様子を見せた。

「・・・自分の信念を、曲げないでね」

「・・・うん、分かった」

黒夢は紫に言われたことを理解できたのかは分からないが頷いた。

黒夢は紫から許可を得たので、博麗の神主となった。
なので、博麗神社に引越す準備をしている。

「・・・ま、これぐらいあればいいか」

黒夢はコルテスから貰ったかばんに自分の着替えと寝るときの服、
それと少々のお金を入れていた。

黒夢はそのかばんを持つと自分の自室においてあったお払い棒を腰
にさした。

「・・・それじゃあ、行って来ます」

黒夢は一人だけにいる自室にそういうと博麗神社に向かった。

飛んでいくと意外に早くついた。

博麗神社は、正直一人で住むには広すぎるほどたくさんの部屋があ
った。

布団は一つしかなかったが。

それと地下倉庫には多少の食料が入れられていた。

おそらくコルテスが事前に入れておいたのだろう。

黒夢は自分の自室をきめてそこに持って来た荷物をしまつと一息つ
いた。

「・・・ふう」

・・・正直、一人でこんな広い場所に住める気はしない。

「どうすっかなあ・・・」

黒夢はそういって少し困った様子で頭をかいた。

すると、近くでよく知った気配を感じた。

「……こりゃあ」

黒夢は自室から出て一番広い部屋のふすまを開け空を見た。

すると、箒にまたがった金髪の少女が黒夢の近くに下りてきた。

「黒夢、今日からここに引越してきたんだって？」

「ああ、その通りだ。佳奈美」

そう、この少女は黒夢の親友でもある霧雨佳奈美である。

彼女は少し前から魔法の本などを読んで魔法の勉強をしている。

そのせいか、箒で空を飛んだり星の形をした攻撃を放つことができるようになっていた。

さすがに、捨虫の魔法はできないが……いつかできるようになるかもな（by黒夢）

「ふーん……一人で住むには広すぎるね」

佳奈美はいつもどおりの笑顔をしながら黒夢にそういった。

「まあ、たしかにそうだな」

黒夢も少し苦笑いをしていった。

「だ〜か〜ら〜、私がたまに来てあげるからね！黒夢さびしがり屋だし」

佳奈美はそういった後に少し上機嫌に鼻歌を歌っていた。

「いや、さびしがり屋じゃねえよ」

黒夢は冷静にその言葉を否定した。

……前半のことは拒否しないのか。

「まあまあ、そんなに照れなくていいって！」

佳奈美はそういいながら黒夢の背中をバンバンたたいていた。

正直、体格はいいとは行かないがいつもトレーニングをしている黒夢には痛くは感じない。

それに幼少時代の頃はよく一緒に風呂に入ったり一緒に寝てたりしていたのであまり反応はしない。

……ある意味悲劇だ。

たとえるなら女性と一緒に入ってといわれたら入りそうなほどに（

あくまでたとえの話である)

「・・・まあ、たまには来てくれよ。そのときはお茶やお菓子ぐらいは出す」

黒夢はそういうと佳奈美の頭をなでながら微笑んだ。

「っ！あ、う、うん！そうさせてもらっよ」

佳奈美は少し顔を赤くして慌てふためいていた。

「修行の方もきっちりとな」

黒夢がそういうと顔を赤くしていた佳奈美の顔色が真っ青になった。

「い・・・いや・・・そっちの方は」

佳奈美は顔を引きつらせながら言った。

「まあまあ・・・そんなに遠慮すんなよ」

黒夢は黒い笑いをしながら佳奈美の方に近づいてきていた。

佳奈美はさらに顔を青くしながら苦笑いをしていた。

「あ・・・はは(黒夢の修行・・・トラウマ物になってるから嫌だなあ・・・)」

そんな様子の佳奈美を見た黒夢は少しため息をつき、

「心配すんな、手加減はしてやるから」

それを聞くと佳奈美はほっとしたのやら、手加減されることに少し腹ただしく思うのかよく分からない心情になった。

まだ、黒夢の隣で一緒に戦うことが出来ないことを気にしているのだろう。

「・・・うん、なら頼もうかな」

佳奈美はそういうと少し笑った。

「そうか、なら今回は森の中でやるか。実戦経験に近いものは得ることが出来るだろうからな」

そういうと黒夢と佳奈美は一緒に森のほうへ向かった。

その後、森のあちこちがぼろぼろになったので二人一緒にコルテスに怒られました。

第九話 神主誕生（後書き）

幻想郷のあちこちが壊れた場合の修復の手伝いをするのは大体がコルテスです。

つまり、苦勞人。

ちなみに幼少時代の話は番外編として書く予定ではありません。

・・・少し年数を飛ばしたりしてすいません。

第十話 決意

「・・・暇だ」

黒夢が博麗神社に引越してきてもう1ヶ月たった。

しかし、特にすることも無い様で暇そうにしている。

してることといえば、賽銭箱の中の確認や境内の掃除くらいである。しかし、黒夢が暇だとつぶやいたことはそんなことじゃないらしい。「・・・何でこないんだ？今日のはずだが」

実は来てから一週間たった後にお金が賽銭箱の中に入っていた。

その入れた人物のことを確かめるためにこうやって見張っているのである。

ちなみにお金は毎週入れられている。

そして、数回確認して入れて入れた人物が複数人いることが分かった。

一人目は美鈴。

二人目は天魔（なぜ入れているかは知らないが）

三人目はルーミア（なぜお金を持っているか知らないが）とさまざまに。

今回は誰が来るのかこっそり見ていた。

と、そのとき誰かが神社の階段を登っている音が聞こえた。

「（二人の足音？）」

黒夢は木の陰に隠れてひっそりと潜めていた。

そしてしばらくすると、

「ふう・・・やっぱりこの階段長すぎよ」

「しょうがねえだろ、博麗大結界を張るのはこの位置がちょうどいいんだから」

やってきた人物は紫とコルテスだった。

「（父さんと母さん！？）」

そして二人は賽銭箱にお金を入れた。

・・・札束をいくつか。

「これならお金に困らないわね」

「ああ、そうだな」

心配そうにしている紫の肩にコルテスはぼんと手を置いた。

そして、

「そんな心配しなくても、あいつならやれるさ」

そうコルテスは紫に話しかけた。

「・・・そうね、あの子は・・・昔人に捨てられた身・・・そしてそこから再び立ち直った子だから大丈夫よね」

紫がそういうと二人は神社の方を見た後に二人で神社から出て行った。

黒夢は木の陰で少し・・・昔のことを思い出していた。

それは・・・赤ん坊の頃の記憶だった。

『あなたは、自分から不幸になろうとしないでね黒夢。昔、自分を捨ててまで私たちを救った・・・コルテスのように』

それは・・・今の今まで忘れていた言葉だった。

そして、黒夢は賽銭箱に入れられたお金を出して神社の中に入ると神棚から一つの箱を出した。

そしてそれをあけると、中にはお金が入っていた。

そのお金はこの1ヶ月間でみんなが入れてくれたお金だった。

そして、黒夢は紫たちが入れたお金を箱の中に入れると

「・・・俺は神なんて信じてないし、信じようとも思わない・・・
けどこれだけは言う。誓いみたいなものだ」

黒夢は箱のふたを閉じた。

「母さんの約束は守れなくなさそうだが・・・俺は父さんのように・・・いや、それは違うな。俺は俺がしたいように・・・みんなを守る！」

黒夢は箱を神棚の中に戻した。

「自分を犠牲にしようとも・・・俺はみんなを救ってみせる！」
黒夢はそう叫んだ。

・・・ほんとうにそれで、みんなを守ることが出来るのかなんて・・・
考えもしないで。

この言った事は、亡くなる前に達成されることになる・・・黒夢の
仲間にとって悲しい結果で。

第十話 決意（後書き）

ちなみに頭の中では亡くなるまでの話は出来上がってます。ただ・・・それをきちんと文字で表せるのかは微妙です。

ちなみに第二部では番外編と称してコルテスと紫の過去話、黒夢が亡くなってからその後を書く予定です。

・・・かなり気が早いけど。

博麗黒夢@9/26更新(前書き)

黒夢の能力や性格などの説明です。

博麗黒夢@9/26更新

名前 博麗黒夢

性別 男

能力 干渉されなくする程度の能力、勘が鋭い程度の能力？（能力かと言ったら違うだろう）????????????（まだ書けないが能力と言ったら違う）

二つ名 楽園の架け橋の神主、人間を超えた神主

友好関係 かなりひろい

説明 博麗の神主をしている。そのせいか友好関係も人間や妖怪、はたまた天人や神や霊などとさまざまである。

他人にはあまり見せないが毎日トレーニングを一人で行っており、佳奈美の特訓相手もしている。

異変解決するたびに友達が増えるとか（本人いわく腐れ縁らしい）

人里に住んでいる阿礼乙女とも何かしら友好関係があるらしい。

本人の霊気の量は人間のものを遥かに凌駕しているので何かあるのだろうか・・・？

いつもは境内の掃除をしたりお茶を飲んだりしている。

神棚に隠してある箱にはお賽銭がたくさん入っており、客が来たときのみこっそり使用するらしい。

本人はばれていないように思っているのだろうが・・・ばれている。

紫やコルテスの目の前ではあまり表には出さないが、多少マザコンやファザコンらしい。

実はさびしがりや。

面倒見はいいのでよく動物や妖怪の治療をしているといううわさが・・・

勘が未来予知かと言うほどに鋭い、何かしらの能力なのだろうか？

そのほかにも力を持っているらしい。
ちなみに生まれつきの両利き。

能力説明 干渉させない程度の能力

相手が自分に使う能力を無効にしたり、黒夢自身に使う能力や毒などを無効化できる。

いつもは無意識で自分に展開しているせいか、ウイルスなどによる病気などにはかからない（知恵熱などにはなる）

非干渉空間というあらゆる能力を無効化する空間を展開することも可能。

ただし霊気の消費が激しい。

この能力は毒など汚染されたものに使うことで解毒などをすることが出来る。

たとえばなら、魔法の森や魔界の瘴気などである。

その他にも、霊気が続くなら時の干渉を封じるなどのこともできる。

黒夢はこれで自分と重力の干渉を封じて空を飛んでいるらしい。

本人によるとこの能力は一種の本能的な自己防衛によって生まれた能力らしい。

戦闘タイプ 主にはお払い棒などを使って戦う。

それに霊気などをあわせて戦う。霊気で武器を構築するのは負担が大きいのであまりしない（妖怪相手や異変解決のときは積極的に使う）

基本的に霊力の消費を抑えるためにお払い棒の先端につける霊気を最大まで通しやすくした紙に技を書いて使っている。

その札を使うときは技の名前を宣言しないといけないというデメリットもある。

佳奈美の場合は黒夢の強さの秘密だとか言っただけで同じようなことをしているがあまり必要は無い。

その他にも霊気を応用した技なども使うらしいが・・・今の状態では詳しいことは分からない。

博麗黒夢@9/26更新(後書き)

とりあえず、今書けるところの設定を記してみました。

まだ戦いのことや他の事は小説内で書いていないので書けません。

第十一話 妖怪の山の仙人（前書き）

黒夢が最初に行った異変解決？です。

東方茨歌仙の多少ネタバレです。

第十一話 妖怪の山の仙人

黒夢が博麗神社にきて一月がたった。

黒夢もこの生活になれてきたみたいだ。

そんなある日に・・・初めての異変が起きた。

正確には少し前までは妖怪がよく襲い掛かってきて黒夢が倒して追いついてたのだが、それは異変には入らないだろう。

「・・・なんだ？」

黒夢はいつもどおり朝食を食べてから縁側でお茶を飲む予定だった。

しかし、縁側のほうに出てみるといつもと違った風景が見えた。

妖怪の山の頂上あたりが霧のようなものに包まれていたのだ。

「・・・行ってみるか」

黒夢は天魔のことも多少気になったので見に行くことにした。

黒夢は体を浮かせるとすぐに妖怪の山に向かった。

しばらくすると、妖怪の山の頂上付近についた。

そしてその霧が出ている前で天魔が立っていた。

「天魔」

黒夢がそう呼ぶと来たのに気づいたのか、天魔が振り向いた。

「ああ、黒夢か」

ようやく来たのかという風に天魔は黒夢に言った。

黒夢はその様子を気にしないでそのまま天魔の隣に着地した。

「この霧はなんだ？」

黒夢はすぐに天魔に聞いた。

「これは、此処に古くから住んでいる仙人の仕業だろうな」

天魔はそういうと少し困った様子で頭をかいた。

どうやら妖怪の山の長である天魔でも無理なようだ。
いや・・・正確には行くのを嫌がっているのだろう。

「・・・仙人の大体は説教好きだからなあ・・・」
精密には変人といったところではあるが・・・

「・・・黒夢、おそらくこの霧はあの人だしているのだろう・・・
止めてくれないか。天狗たちもすこし困っているようだからな」
霧という物は元は水蒸気である。

だから近くにいるだけでもかなり濡れてしまう。
おそらく、ただ羽や服を濡らすのがいやなだけだろう。

「・・・はあ、分かった」

黒夢は少しため息をつく霧の中に入っていった。

黒夢は外からの水分と自分を非干渉にすることで濡れるのを避けている。

「さて、早く仙人を探すか・・・もしくは」

黒夢はそういうと辺り一体を歩き始めた。

霧のせいで目の前もまともに見えないので勘を頼りに歩いている。
そしてしばらく歩いていると、大きな水のたまり場・・・湖を見つけた。

「ん？これは・・・湖か。おそらく此処にいるだろうな」

黒夢は湖の周辺を歩き出した。

そしてしばらくすると、人影が見えた。

「（・・・ん？）」

人影以外に沢山の何かがあった。

それは人ではなかった。

そして黒夢はコルテスがもっていた本の中でしか見たことの無かった物で・・・

「(ぞ、ゾウ!? 何でこんなところに)」

そしてゾウの影の上には紐のような物の影と龍の影が見えた。

「(・・・龍がつれてきたのか? でもどうして)」

黒夢がそう考えているとき、バシヤア! とゾウの鼻から勢いよく水が噴出した。

そしてそれは一気に水蒸気のようになって回りに飛び散った。

「(なるほど・・・これほどの数のゾウがいればたしかに山の頂上は霧に覆われちまうな)」

此処にいるゾウは軽く50頭を超えていた。

黒夢の勘だとおそらく別々のところにも沢山いるだろうと思った。

それだけいれば、たしかに霧で山の頂上を包み込むことぐらい出来るだろう。

「(・・・まあ、この霧はゾウの水浴びのせいだとして・・・これと呼んだ仙人に話をつけないとな・・・)」

だが、黒夢はゾウのいる湖の中に入ろうとは思えなかった。

像は危害の加えない温厚な性格であることも知っているし、こちらから攻撃しない限りは暴れないだろう。

しかし・・・問題はそのゾウの中央にいる仙人だ。

影だけでは性別は普通は分からないだろう。

しかし、超人的な勘をもっている黒夢にはそれが女性だという事が分かった。

そして・・・湖の中にいるという事は、濡れている事は確実である。そして、・・・裸でいる確率も高いことになる。

服を着ていてもおそらく透けた状態になっているだろうから意味は無い。

「(うーん・・・どうするか)」

幾ら博麗の神主と呼ばれようと黒夢は男で、少年である。

流石にそこまで体制ができているわけでは無い。

・・・たとえば紫や美鈴と幼少時代に一緒に風呂に入っただけだ。

(紫には最近までねだられて一緒に入っていたらしいが・・・)

「(とりあえず、まっていよ)」

黒夢がそう思ったとき目の前にいきなり裸体の女性が現れた。

「あなたですか、さつきから私たちのことを見ていたのは」

おそらく仙人であるその女性にそういわれても黒夢はしばらく何も答えなかった。・・・おそらく思考停止でもしているのだろう。

「・・・あの、どうしました？」

仙人は黒夢に更に近づいた。

すると、

「skdjさいおあsjxlkssx!!??」

とわけの分からない言葉を発して湖の中に飛び込んだ。

おそらく顔は真っ赤だったのだろう。

「ちよ、ちよっと大丈夫ですか!?!」

さっきのことで常時発動している能力以外は解除されてしまったらしく・・・

「ぶはっ!はあはあ!」

びしょぬれの状態で黒夢は湖から顔を出した。

そして、再び仙人の方を見て

「・・・」

無言のまま気絶した。

「ちよ、ちよっと!」

仙人は急いで黒夢を自分の道場に連れて行った。

「・・・んう?・・・」

黒夢は布団の上で目を覚ました。

自分の服は真っ白の着物に変わっていた。

「(ああ、そうか・・・俺はあの時・・・)は

っ！……まずかった)」

黒夢は再びショートしそうな頭を我に返した。

「ああ、おきましたか」

黒夢は声のしたほうにむいた。

そこには、胸元に花のついた服を着ていて右腕は包帯で包まれていて左手首には鉄の腕輪をつけている女性がいた。

髪の色は赤色少し長めの髪だった。

黒夢は彼女を見た事があった。

「……あなた、人里で説教しまくってる仙人だな」

「ええ、そうよ。……あ、名前は聞いたこと無いわよね。私は茨華扇」

黒夢はしばらくするとさっきのことでもた気絶しそうになるので頭をブンブン横に振った。

「よし！……俺は博麗黒夢。人里の少し離れたところにある博麗神社の神主をしている」

「そう、よろしくね黒夢」

二人が自己紹介を済ますと黒夢は聞きたい事があったので聞いてみた。

「あの動物達って、お前の友達なのか？」

黒夢の言った事に華扇は少し驚いたがすぐに笑顔で、

「ええ、私の友達ですよ」

と答えた。

黒夢はその答えに満足したようで、

「そうか、……さて霧のほうももうなくなつたみたいだし……もう帰るな、華扇」

「そうですね……あ、服はそちらに」

黒夢はその服を見ると少し眉をしかめた。

まだ、乾いていないのだ。

「……すまない、この着物後日返しに行くから……その」

「ええ、いいですよ」

黒夢は少し申し訳なさそうにお辞儀をすると博麗神社の方向に飛んで行った。

華扇は黒夢の言ったのを見ると修行の一環の過去を振り返るということを始めた。

そして、それから少し経つと突如顔を真つ赤にした

「えっ・・・あ・・・こ、黒夢に見られてたんです・・・か」

華扇はその日、修行に集中できなかつたらしい。

後日、黒夢は華扇の道場に着物を返しにやってきた。

「華扇、着物を返しに来た」

黒夢が来ると河川は少しビクツとしたがすぐにいつも通りの態度に戻って、

「ええ、そうですか」

と言って着物を受け取った。

すると黒夢は
「・・・お礼がしたいから、俺の神社に来ないか？お茶位は出すが」と華扇に言った。

華扇は少し驚いたが、

「わかりました、では貴方にどれだけ邪気が無いか見るついでに行くとしましょう」

と言った。

「（これは行くということを取って良いんだよな）」

これがきっかけで、華扇がよく博麗神社に来るようになったとか。

第十一話 妖怪の山の仙人（後書き）

おそらく知らない人が結構多いと思う華扇を出してみました。
詳しくはぐるるか東方Wikiで見てください。

今回は異変解決と言うには小さすぎる物ですね。

しかし、しばらくは大きい異変（紅魔郷など）はおきません。
それは黒夢が14になってから起きていきます。

第十二話 汚くても生きていこう(前書き)

この話はギャグに近いほのぼのです。

ちなみに佳奈美や黒夢は・・・おそらく13か14だと思います。

黒夢が博麗神社での生活に慣れてるからです。

第十二話 汚くても生きていこう

「・・・金が手に入らない！」

黒夢は仁王立ちをして両手を腰に当てながらそう言った。そしてその近くには、

「・・・なんでそんなに誇らしげに言ってるのよ・・・」
最近友人になつた華扇と、

「それにいつも神社に引きこもってるのにお金が入るわけないでしょ」

幼少時代からの幼馴染の佳奈美がいた。

「む、失礼だな・・・買い物ぐらいには出てる」

黒夢はさつきまで座っていた座布団の上に座つた。

華扇と佳奈美も座布団の上に座っている。

そしてそんな3人の前には湯飲みに入つたお茶がある。

「でも、それ以外ででているのですか？」

華扇がそういうと黒夢は沈黙した。

「・・・ていうか、黒夢の両親に貰えばいいじゃん」

佳奈美は紫やコルテスにお金を貰えばいいと提案した。

軽く親バカの二人なら喜んで金を出すだろう。

しかし、

「それは嫌だ。俺は一応自立してる身だからな」

と言い黒夢は頑なに拒んだ。

「じゃあどうするの？」

華扇は黒夢に聞いた。

「そうだな・・・神社と言えばやっぱり賽銭だよな。賽銭で儲けるつてのは」

黒夢はそう提案した。

しかし二人からは

「こんな妖怪の森の奥の神社に誰が好んで行くんですか？」

「それに神社と言ってもこの神社って・・・神いないよね」という痛い一言・・・いや二言が飛んできた。

その言葉は確実に黒夢の体に突き刺さった。

「ぐっ・・・ならば」

黒夢は勢いよく立ち上がり、お払い棒を手に持ち上に掲げると

「何かをたたえて神がいるようにみたてればいいんだ！」

・・・正直神に仕える神主が言っただけを言い放った。

「・・・しかし、そうするにしてもどうするのですか？」

華扇はしばらく黒夢と一緒にいて、言っても無駄だろうということに分かっているので説教はしなかった。

「ほら、この幻想郷って一人の神と一人の龍神で最終的には作られたでしょ」

幻想郷の管理をする中心の神と幻想郷を隔離する結界を作った龍神のことである。

ちなみに、幻想郷と外の世界はまだ完全には隔離できてはいない。日々、龍神や紫が結界の強化をしているのだが・・・あと一息というところらしい。

そして、黒夢の役目は異変解決、人里の守護結界の作成と継続、強化。

最後に・・・結界が出来上がるまで外の世界に出ようとするやからを追い払う役目がある。

それが仕事で、そのうち異変解決や人里の守護結界などは終わったあとにはお礼を兼ねて現金が手に入る。

しかし、結界の継続のために行くのや強化しに行くのは・・・多くて2ヶ月に一回。

長くて半年に一回である。

異変もしよばい異変ばかりであまり現金は手に入らない。おそらくお金が足りないと言っているのもそのせいだろう。

「確かにその通りだけど・・・まさかその神と龍神を祀るとか・・・」
「ああ、その通りだ！」

と呆れ気味で華扇は考案した。

「でも・・・借りを作るには・・・」

「いや、仮以前の問題ですからね!？」

ある意味そんなところは律儀・・・て言うかありがた迷惑である。

華扇はそんな黒夢に「ご飯でも奢ろうかと考えていた。

「・・・そういえば、このお茶はどこから？」

佳奈美は自分達の目の前においてあるお茶を見た。

もしかしたら、雑草で作ったお茶かと思うとぞっとする。

「あー、それは俺が好んで飲むお茶だから・・・とはいっても貰い物だけだね」

と言うのを見るとある意味二人は安心した。

「・・・とりあえず、私にご飯を奢りますから私の家に来て下さい!」

華扇はそういつと黒夢の腕を掴んで無理やり連れて行くこととしていた。

「え・・・いや・・・」

佳奈美にも強行されて結局華扇の家でご飯を食べた。

とある真実

「・・・ま、ばれなくてよかったかな」

食べ終わった後に神社に帰宅したガツトはそういった。

実のところ、人里の人も里の守護の人の同行で賽銭箱にお賽銭を入りに来たりする。

それ以外にも紫たちも入れてる所為でかなりの金額が溜まっている。しかし、黒夢はそれを使おうとはしない。

逆に神棚にこつそり全てのお賽銭をしまっているのである。

これも、黒夢なりの感謝の仕方らしい・・・というのもあるが本当は願掛けのようなものらしい。

ちなみにこのお金は、客人などが来るときは真っ先に使用する・・・が

決して自分のためには使用しない。

正直・・・雑草や土を食べるくらいなら普通に食べばいいのだろう。ちなみに雑草や土を食べてると言うことは・・・本当のことです。

第十二話 汚くても生きていこう(後書き)

賽銭のことは前に話で書きましたが今回はそれを詳しく説明したものです。

いつもはこんな風な日常が続きます。

後・・・黒夢の年齢が結構飛んでいってすみません！

第十三話 鬼ノ異変 始まり (前書き)

これは黒夢が解決した異変の中でもかなり大きかった物の一つである。

第十三話 鬼ノ異変 始まり

鬼、それは最古から存在する妖怪。

鬼は嘘を嫌い、力をもち喧嘩を行う。

そんな鬼達も、嘘をつくようになる人間を嫌うようになっていった。だが、鬼は消えたわけでは無い。

幻想郷の・・・妖怪の山、あその周辺にもまだ・・・鬼はいる。

「あまり、厄介ごとは持ち出さないでくれよ」

ある大きな部屋、そこには一人の鬼と一人の天狗が居た。

鬼の方は知らないが、天狗の方は・・・妖怪の山のリーダーでもある天魔 勇魔だった。

「はっ、わかりました」

そういうと天魔は部屋から出ようとした。

「おお、そうだ」

しかし、出る前に中にいる鬼に呼び止められた。

「・・・なんででしょうか？」

「最近、面白い人間がいると聞いてな・・・少し、四天王の一人を向かわせてみた」

天魔はそれを聞くと表情では出さなかったが、少し驚いていた。

そして、頭の中には一人の人間が思い浮かんだ。

「たしか・・・ああ、そうそう。博麗黒夢といったかな」

「・・・失礼しました」

天魔は部屋から出て行った。

部屋から出た天魔はしばらく無言で歩いていたが・・・すぐに苛立

った様子で壁を足で蹴った。

その壁には天魔の靴のあとがついていた。

「・・・ちっ！気に入らねえ」

現時点では表上では天狗が妖怪の山を支配しているが実際は今でも鬼が支配している。

鬼の四天王は実際権力なんてどうでもいいらしく好き勝手に動いているが・・・問題はさっきの鬼である。

「・・・雷鬼のやつ・・・」

さっきの鬼・・・雷鬼は鬼の中でも珍しく権力を欲する鬼である。

そして、同時に強いやつも欲する。

「・・・とりあえず、黒夢の所に行ってみるか」

天魔はそう呟くと背中の中を羽根を広げて博麗神社に飛んで行った。

「・・・ふあゝあ・・・眠い」

「まったく、あなたは何でそういつもだらけているんですか！」

博麗神社、博麗大結界を守るために存在している神社。

黒夢はその中の縁側で寝そべっていた。

最近は妖怪に襲われにくくなったようでする事が無いようだ。

そんな黒夢の様子を見て黙っていないのは、もちろん仙人である華扇だ。

「だいたい貴方は毎日の生活習慣が悪すぎですよ」

ガットはぼけとしながら華扇の説教を聞き流していた。

だが、ガットは少しだらけながらだが起き上がると腰にさしていた

お払い棒を抜いた。

「……どうしたのですか……！」

すると、ガットの視線の先にある庭の方に霧が集まってきた。そして、霧が集まるにつれてそれは生物の形になっていった。

「（あの霧……まさか）」

そして霧が集まると頭にでかい角を持った少女が現れた。

「やつほー、久しぶり華扇。そして始めまして、博麗黒夢」

黒夢は華扇となんらかの関係を持っているなどは気づいたが華扇の様子がおかしいのにも気づいた。

「……萃香、何で貴女が此処に」

「えー、だって雷魔に面白い人間がいるっていわれたから……」

まあ、確かに面白そうな人間だけだ

萃香は黒夢の方を見るといきなり殴りかかってきた。

黒夢はお払い棒でガードしたが、そのまま吹き飛ばされてしまった。

そして森の方へとんでいった。

「黒夢！」

「あらら、この程度？」

すると、黒夢の吹き飛ばされた付近で霊気が放出された。

「……おい」

そして、そこには霊気をまとった黒夢がいた。

少し流血しているが問題ないだろう。

黒夢は立ち上がると萃香の方を見た。

「神社が壊れたら困るからなあ、こっちで戦おう」

「……いいよ」

萃香はそう言うと黒夢のいる森に向かった。

華扇も心配なのかガットのいるところへ向かった。

第十三話 鬼ノ異変 始まり (後書き)

次回は萃香 vs 黒夢です・・・？

ちなみに鬼の力は能力ではなく技能なので非干渉には出来ません。

第十四話 鬼ノ異変 決闘

博麗神社に近い森の中で、三人の人影が見えた。

一人は博麗神社の神主である博麗黒夢。

そしてもう一人は・・・鬼の四天王の一人である伊吹萃香。

そしてその様子をみているのは黒夢に手を出すなど言われた茨華扇。

「じゃ、行かせてもらうね」

萃香はそういつと黒夢に一瞬で近づいてきた。

黒夢は萃香に向けて数枚の札を投げつけた。

だが、その札は素手で弾かれてしまった。

黒夢は萃香が殴ってくるのを感じるとすぐに避けた。

「へえ・・・私の攻撃をかわすなんて、やるわね人間！」

「まあ・・・な！」

黒夢は再び数枚の札を萃香に投げつけた。

しかし、それもさっきのように素手で弾かれてしまった。

黒夢はそして弾かれたのを見ると懐から一枚の札を出した。

「霊符「五十結界」」

萃香は焦って周りをみた。

すると、萃香を中心にして札が周りの木に刺さっているのが見えた。

すぐに移動しようとしたが、

「遅い！」

周りに結界が張られて中心から大きな爆発が起こった。

「（・・・やったか？）」

煙で視界が見えにくくなってはいるが、手ごたえはあった。

しかし、黒夢は今まで鬼という生き物と戦った事は無かった。

そのせいなのか、油断を一瞬でも作ってしまった。

煙の中から、一瞬で出てきて黒夢に近づいてきた・・・萃香。

一瞬の油断が命取りとなるのは、正にこのことだ。

黒夢は反射的に自分の目の前に霊気で作った安易な結界を張った。

しかし、それは萃香の拳によって一瞬で砕かれてしまった。黒夢は再びお払い棒で攻撃を受け止めようと構えた。

しかし、右手から放たれた拳は・・・お払い棒で受けたが弱々しかった。

萃香は左手で、黒夢のわき腹を殴った。

黒夢は直接わき腹に萃香の拳を受けたせいで、血を吐きながら地面に叩きつけられた。

「黒夢！」

少し離れたところからは、華扇の悲痛な叫びが聞こえた。

黒夢はしばらく地面に倒れていたが、木を支えの代わりにして立ち上がった。

黒夢は頭や腕から流血していた。

「・・・まずいな、さっきの一撃でアバラの三四本はもっていかれたか。さっきの一瞬、靈気で結界を作ってなかったらやられていた」

黒夢は息切れしながら萃香の方を見た。

少し肩や頭から流血はしているようだが、致命傷では無いみたいだ。

「(くそっ、油断しちゃった)」

黒夢は再び懐から複数枚の札を出して投げつけた。

「同じ攻撃が効くとも？」

萃香は今度は掌から妖気の塊を出してそれで消そうとした。

だが、黒夢にもそれは十分分かっていて。

黒夢は懐から札を出した。

「靈符「靈破槍」」

すると投げた札が靈気によって作られた槍に変化した。

「なっ！」

萃香はそのまま妖気の塊を放った。

しかし、まだ数本靈気の槍が残っていたらしくその槍が萃香の肩と腹部を貫いた。

萃香は血を吐きながら地面に叩きつけられた。

黒夢はよろけながら萃香に近づいた。

萃香を貫いた槍は地面にまで刺さっているから心配は無いだろう・
・と一瞬思ったが鬼の腕力を思い出しそう考える事はやめた。

念のため、札の一枚を霊破槍に変えて手に持ちながら近づいていった。

すると萃香が刺さっている槍を素手でつかんで、砕いた。

黒夢は警戒して槍を構えた・・・が萃香が次に言った事は思ってもいなかったことだった。

「・・・ふふっ、人間・・・いや黒夢か。中々面白かったよ！」
そういつて笑っていた。

黒夢は本で読んだ鬼についての記述の中に、鬼はうそをつかない種族で人間を試すように戦い面白いと判断したらつれて変えるとかかれていたのを思い出した。

とにかく、今は安全だと気づくと黒夢は霊破槍を解いた。

「・・・疲れた」

そういつて地面に座り込んだ。

とりあえず、黒夢は萃香と華扇をつれて博麗神社に戻ると博麗神社にあるコルテスが置いていった救急箱で・・・華扇に治療されていた。

とは言っても、骨のひびなどは治せないので応急処置程度の治療しか出来なかったが。

「もう、黒夢はいつも無茶ばかりして。それにあなたには注意力が

足りません！」

・・・そして、いつものように説教を受けていた。

その時に萃香が中に割り込んで来て、

「まあまあ、落ち着きなつて華扇」

と喋って華扇の説教に止めに入ってきた。

華扇はしばらく無言になっていたが、萃香の服の襟をつかむと

「元はといえば、あんたのせいでしょうが！」

と言つて神社の庭に向かつて思いつきり投げ飛ばした。

萃香はその勢いのせいで頭が地面に刺さってしまったている。

華扇は萃香が刺さつているところに行くのと萃香を蹴り続けた。

「・・・・・・・・」

黒夢は疲れているせいかわも言わなかった。

ただ、黒夢はあつたときから華扇に角があるのは知ってるしそれを隠すために黒夢は作つたお団子頭にするための布をあげたのだから。

「（それでも・・・）なあ、もしかして華扇つて鬼の四天王なのか？」

黒夢がそういうと萃香を蹴っていた華扇の動きが止まった。

そして、さび付いた機械のような動きで首を黒夢の方に向けて、

「ヤダナーソンナワケナイジャナイカ」

と片言で言つた。

黒夢はその様子を見ると、やっぱり嘘つくの嫌いなんだな・・・と思つた。

とうにかこの様子じゃ嘘をついているうちにも入らない。

すると、地面に刺さつたまま萃香が

「えー、華扇つて私達と同じ四天王じゃ・・・」

その続きを言う前に華扇に更に地面に深く刺さつていつている。

黒夢はその様子を見るとため息をついた。

「（どうやらうそが嫌い・・・と言つかうそをつかないというのは本当みいだな）」

黒夢がそう思っていると、空から風を感じた。

黒夢が空をみると、そこには妖怪の山の長でもある天魔がいた。

「天魔、なんのようだ？」

黒夢がそういうと天魔は博麗神社の庭に着地した。

そして、黒夢の体の具合などをみると・・・ある意味驚いていた。

「・・・鬼と戦ってそれだけの怪我ですんだのに加えて、その怪我で普通に過ごしているお前って・・・人間の皮を被った妖怪だな！」
そういつてビシッ！という効果音がつくほどに天魔は黒夢を指差した。

黒夢は少しイラツと来たらしく霊破槍を天魔に投げつけた。

天魔はそれを避けると、

「そんだけ元気だったら大丈夫だな」

天魔はそういうと黒夢が座っている縁側に座り込んだ。

黒夢はしばらく黙り込んでいたが・・・口を開いた。

「なあ、もしかして・・・もしかしてだが、さっきの戦いは誰かに仕組まれた《・・・》ものなのか？」

天魔は少し驚いたが、すぐに口を開いた。

「ああ、そうだ。妖怪の山を裏から支配している鬼・・・雷鬼によつてな」

黒夢はそれを聞くと神社の奥に入りしまっていた何枚かの札を懐に入れてお払い棒を持つと、庭に出た。

「・・・てめえ、まさか」

天魔は何かに気づいたのか、黒夢の方を見た。

「おそらく、俺が邪魔なんだろうよ。当たり前だよな、今まで幻想郷でルールを張ってきたのは母さんだけなんだから。なのにさ、第三者・・・それも人間なんかにそんなことされたら、消したくなるのもごもつともだ。・・・だが」

黒夢は手にもつていたお払い棒を更に強く握った。

「こんな回りくどいやり方は、少し・・・気に入らないかな。それに、俺を狙ってくるならうけてたつ」

黒夢はそのまま妖怪の山に行こうとした。

しかし、目の前には華扇と地面から出てきた萃香が立っていた。そして、

「私たちもついていく」

と萃香が言った。

黒夢は何故ついていこうとしているのかわからなかった。

「どうせ、一人で行ったら危ないでしょ。だったら、付き合っわよ」
華扇はそういうと黒夢に笑いかけた。

「黒夢は面白そうな人間だから、アイツにとられるのは勿体無いし。それに私たち三人ならアイツを倒せるかも」

「三人じゃない！四人だよ」

すると、突如空から声が聞こえてきた。

その声には、黒夢と華扇は聞き覚えがあった。

「・・・佳奈美」

空には箒にまたがった佳奈美がいた。

「また、私を仲間はずれにさせようとして！」

黒夢は三人をみると、・・・ため息をついた。

「一人で十分だって・・・でも、ついていきたいなら好きにすれば」

黒夢はそういうと妖怪の山に向かって飛び始めた。

華扇たちも黒夢を追いかけるために飛んで行った。

そして、博麗神社に残っている天魔は・・・

「・・・ふん、まさか鬼の四天王二人が裏切るとはな」

天魔がそういうと天魔の周りが霧に包まれた。

すると、そこには天魔の姿は無く角の生えた鬼の姿が現れた。

「このままじゃ、あの天魔の野郎もやつらに味方しそつだ。早くアイツ等を始末しないとな」

そついうと鬼は姿を消した。

第十四話 鬼ノ異変 決闘 (後書き)

パーティは四人になったぞ！

・・・はい、すいません。

少し久々の投稿です。

後は本編ではあまり描くことの無い設定について。

まず、文達の服装や見た目について。

文は・・・見た目は12歳位です。

それで服装は東方香霖堂でサブ天狗たちが着ていた天狗装束です。

(詳しくはピクシブで香霖堂天狗装束と調べてください)

天魔や大天狗たちはそれが黒色になった服装です。

その他は・・・あまりかわらないかも。

第十五話 鬼ノ異変 霧雨

黒夢達は妖怪の山に行くために飛んでいた。

萃香は自分の体を霧にして周りの様子を見ている。

今のところは何もみないみたいだが・・・

すると、黒夢は手から霊気で作った壁を出した。

そして、一つの妖気の塊が霊気の壁に当たった。

霊気の壁は多少傷があるだけだった。

「敵のようね」

華扇はそういってこぶしを構えて妖気の塊が飛んできた方を向いた。そこには、角の生えた一人の鬼がいた。

「・・・霧雨、貴方が相手のようね」

「・・・私が用があるのはその博麗黒夢だけだ。退いてもらおうか・・・四天王の面つぶしが」

華扇はその言葉を聞いても表情一つ変えていなかった。

「俺が相手をする」

そういって黒夢は霧雨の方に行こうとしたが萃香に止められた。

黒夢は多少驚いていた。

「あなたは私との戦いで怪我をしているのだから見ていたら？それに、今手を出さないのは華扇のためにもなるからね」

黒夢は萃香が言ったことを聞くとしぶしぶ戦うのをやめた。

佳奈美も今のところは手を出さないつもりようだ。

「・・・どうしても相手をしなければならぬのだな」

「ええ、そうよ」

華扇はそういって霧雨の方に向かって殺気をだした。

霧雨の方はそのまま立っているままだった。

先に仕掛けたのは華扇の方だった。

華扇は左のこぶしで霧雨を殴りつけた。

しかし、霧雨は当たる前に霧のようになって消えた。

「あれは、萃香と同じような能力！？・・・というわけではないよ
うだな」

「あれは、幻術。彼の能力は幻術を操る程度の能力」

そう、霧雨と言う名を持った鬼の名の由来こそあの幻術を操る程度
の能力なのである。

しかし、強力な能力であるがそれは鬼達には嫌われていた。

理由は、鬼は嘘をつくのが嫌いな種族であるという理由である。

幻術とは、偽りのものを作り出す力である。

つまり存在自体が鬼の嫌う嘘という事になる。

そのせいで霧雨は仲間である鬼達に嫌われ続けてきた。

しかし、そんな彼に救いの手をくれたのが雷鬼だった。

それで彼は雷鬼を慕っている。

「というわけ」

萃香は黒夢にそう説明した。

黒夢はそれを聞くと少し気に入らなさそうにしていた。

「くだらない、たかがそんな能力を持っているだけでそいつを嫌う
なんてな」

黒夢はそついうと霧雨と華扇の戦いに目をやった。

「くっ・・・」

今は、正直華扇の方が押されていた。

幻術で5人に分裂している霧雨の本体が分からないからだ。

しかもその幻術には妖気を混ぜてどれが本物が探知されないように
している。

これでは鬼の四天王の力を持っている華扇でも手を出すことが出来
ない。

「どうした、この程度なのか？」

華扇は霧雨に言われて少しイラついていた。

そして右手の包帯を解いて霧雨たちに攻撃を仕掛けた。しかしそれは全てよけられてしまう。

しかし、その包帯は華扇の意志で自由自在に動く包帯、霧雨達を追いかけている。

だが、長さに限界があるせいで途中でなくなってしまった。

「ふっ・・・残念だったな」

「いや、これでいいの」

霧雨はその言葉を聞いて疑問に思っていた。

右腕の代わりに使用していた包帯を失って、使えるのは左腕だけ。それで何を狙っているのか。

華扇はいつの間にか左手に掴んでいた包帯を引っ張った。

すると5人に分裂している霧雨達全員が包帯に絡まった。

「な、なんだと!？」

そして、華扇が持つている妖気を包帯を通して霧雨達に流した。

すると、多大なる量の妖気を流し込まれた霧雨達のうち幻覚で構築されたものは消滅し実体である霧雨は他人の妖気を流し込まれたせいで多大なるダメージを負っていた。

しかし、すぐに包帯をちぎって流し込まれる妖気から脱出した。

だが、突如霧雨の腹部に強烈な痛みが襲った。

それは華扇の左こぶしが腹にあたった痛みだった。

霧雨は、そのまま地面にたたきつけられた。

おそらく、しばらく立ち上がることはできないだろう。

「ぐふっ・・・まさか・・・包帯をわざと大げさに見せることで、自分の張る罠に気づかせなくさせるとはな」

包帯は華扇の右腕に戻っていつている。

「・・・鬼の四天王と呼ばれていても、私も根本的には貴方と何にも変わりはない。勝つためにはならこういう姑息な手も使うし、だから私もあんたが勝つためにその能力を使うことに何も反対はしていない」

霧雨は華扇がそういつたのを聞くと驚いた表情をしていた。昔の華扇なら、今のようなことを言わなかっただろう。

しかし、昔体験したことから・・・華扇は自ら鬼であることを封じて仙人として名乗っているのである。

「・・・ふっ、完敗だ。だが、さすがのお前達でも雷鬼様には勝てない。雷鬼様は、鬼としての器を越えているのだから」

霧雨はそういつた後に気を失った。

華扇の方も余裕そうに見せているが、幾度となく食らった霧雨の攻撃に加えてさつき使用した妖気によってかなり体力を消耗しているようだ。

「・・・華扇、無理ならここで戻ってもいいんだぞ」

だが、華扇は首を横に振った。

黒夢はそれを見ると勝手にしろという感じで先を進んだ。

「まったく、華扇も無茶するね」

そういつと萃香は華扇を持ち上げるとそのまま黒夢を追いかけた。

「にしてもさあ」

佳奈美は突如口を開いた。

「・・・なんだ？」

「霧雨って、私の苗字と被ってるなあと思ってね」

黒夢はそれを聞くとかだらなさそうにしていた。

そして、黒夢のその様子を見ると佳奈美は少しふてくされた様子をしていた。

第十五話 鬼ノ異変 霧雨 (後書き)

ちなみに、霧雨は鬼に嫌われて鬼の四天王になれなかったただけで実力からすれば鬼の四天王と同等ぐらいの力は最低あります。

第十六話 鬼ノ異変 力vs策

霧雨を倒した黒夢たちは先に進んでいた。

そして今は妖怪の山の森の中。

萃香が言うには妖怪の山の森の中に秘密の扉があるらしく、そこから入れるという。

そして、黒夢たちはその秘密の部屋についた。

「ここが雷鬼がいるところに行くための扉だよ」

萃香は無い胸を誇らしげに張っていった。

一方黒夢と佳奈美の方は、

「……」

「……」

あきれた様子で見ている。

萃香と華扇たちは不思議そうに二人の様子を見て不思議そうにしている。

「どうしたんですか？」

華扇は黒夢たちにそういった。

黒夢の方はまだあきれた様子をしていて、佳奈美の方は苦笑いしている。

「いや……これはね」

「……わかりやすぎだろ」

その入口の上には、でかかどこう書かれていた

『雷鬼の家』……と。

「（雷鬼ってやつは何を思っでこうしたんだか）」

黒夢はそう思いながらため息をついた。

そして黒夢はそこに入ろうとした、とそのとき！

こぶしが黒夢に向かって放たれた。

「！」

黒夢はとっさに札で霊壁を作りお払い棒を構えた。

しかし、霊壁は素手で砕かれそのこぶしは黒夢がガードをするために使ったお払い棒にあたった。

黒夢はそのまま後ろに飛ばさて木に直撃した。

「がっ!?!」

「黒夢!」

佳奈美はそういつたがすぐにこぶしを振り上げたほうに箒を構えて振り向いた。

するとその先には、こぶしを構えた一本の角を持った女性がいた。

「勇儀! なんてあなたがここに?」

華扇はそう言った。

どうやら華扇の知り合いのようだ。

萃香のほうも驚いた様子をしている。

それは当然である、なぜなら彼女は—— に行ったはずなのだから。

「久しぶりだねえ萃香、華扇」

勇儀はそう言うのと二人に笑いかけた。

しかし、その笑いかけ方は戦闘体制をとったまま行われたため決していいものとはいえない。

佳奈美は内心焦っていた。

多少油断していたとはいえ、あの黒夢を気絶させたのだ。

黒夢はおそらくしばらくは目を覚まさないかもしれない。

「さて、とりあえず萃香たちの相手はしたくないからねえ。・・・」

博麗

「そういうと、萃香たちの前に一人の女性の鬼が現れた。」

萃香たちは現れた博麗によって足止めを食らっている。

「さて、あなたは面白そうな人間かは知らない。だから、戦って判断させてもらうよ。」

佳奈美はその言葉を聞くとかぶっている黒い魔法使いの帽子を深くかぶりなおした。

そして次の瞬間!

勇儀に向かって光を放たれた。

その光は佳奈美の前に出現した魔法陣から放たれている。

勇儀はその光をよけながら佳奈美に向かっていく。

佳奈美はすると懐から紫色に光る怪しげな粉を周りにばら撒いた。すると佳奈美の姿がぼやけていった。

「へえ、どうやら幻術の魔法のようだねえ。だけど、私にそんな小細工は効かない！」

すると勇儀は目を閉じてこぶしを構えた。

佳奈美は幻術の中、それを見て嫌な予感がした。

佳奈美は黒夢ほどの勘を持っていないとは言っても、危機察知能力はかなり高いものであるのは間違いないのである。

佳奈美は自分の周りに魔法のシールドを作り出した。

その次の瞬間！

勇儀のこぶしが佳奈美のマジックシールドに当たり・・・シールドが割れた。

そして、勇儀のこぶしが佳奈美の腹部に当たった。

佳奈美はそのまま地面に体を強打した。

第十六話 鬼ノ異変 カVS策 (後書き)

つづきます。

ちなみに佳奈美の通常の服装は魔理沙のかぶっているような帽子に魅魔の服装みたいな感じです。

過去番外編 博麗、あらわる（前書き）

過去番外編では黒夢と人里の関わりを書こうと思います。

過去番外編 博麗、あらわる

それは、黒夢が10歳のころに正式に黒夢が博麗神社の神主になってからまだ少ししか経っていない頃の話。

その頃はまだ、黒夢の噂は妖怪はおろか人里の人間にすら流れていなかった。

ただあつたとしたら、人気の無い神社に神主が現われた・・・というぐらいである。

実際その頃は黒夢はまだ大きな事件事件の解決など行っていなかったから当然だろう。

それに加えて、その頃の人里は大変だったということも合った。

その頃は幻想郷のルールが出来たばかりで、それに逆らう妖怪ばかりがいた。

紫が直接話をつけた、妖怪の山の長の天魔などの大妖怪の集団などはしなかったとしても弱小妖怪や中級妖怪はそのようなことをしていたからである。

大体は里の守護の人々が処理をしていたが数は増えていく一方で困り果てていた。

かといってこの人里から離れたら住む場所もなくなるのではなれることもできない。

まあ、そんなこと紫が許すはずも無いだろうが。

妖怪の賢者と呼ばれている紫も何とかしていたが、とにかく数が多かった。

そんな中でも、人里の守護の一人の上白沢 慧音は根気よく妖怪を退治したり寺子屋で子供たちに授業を教えたりしていた。

「じゃあ、今日の授業はここまで！」

慧音はそういうと開いていた教科書を閉じた。

そしてしばらくすると生徒たちはみんな帰っていった。

「・・・ふう、今日も無事に済んだか」

慧音はそういうと一息ついていた。

最近は妖怪たちも人里を襲ってきていないので慧音も安心していた。

だが、決して気を抜いているわけではない。

今でもいつ妖怪が襲ってくるかわからない。

実のところ、そう思っている慧音は獣人だ。

彼女は満月の夜になると、白沢に姿を変える。

しかし、人間に敵意を持っているわけではない（逆に好んでいるの

かもしれない）のでこうやって妖怪を追い払うのに一役買っている

のである。

だが、最近になると人里にすんでいる大人たちは彼女に妖怪の退治をまかせつきりになった。

彼女はこのままでは人間たちは自分たちで溶解に対処できなくなる

と思い、せめて自分の知識を最低限子供たちに与えて将来に役立て

て欲しいと寺子屋で授業をしているのである。

そんな慧音は、今も気にしていることがあった。

それは、十年前も前のことだ。

幻想郷の外（この頃はまだ隔離されてはいないがそういったほうが

いいのかもしれない）から来た夫婦がいた。

その夫婦はたまたま幻想郷に来てしまったらしい。

そして、その夫婦は幻想郷の自然や人里の人々の人柄を気に入って

人里にすむようになった。

そんなある日、夫婦に子供が出来た。

その子供は、生まれながら特殊な力を持っていた。

それはこの幻想郷では強い妖怪などがほぼ当たり前持っている能力と呼ばれるものだった。

しかし、その夫婦はそれに恐怖した。

自分とは違った力を持つ自分の子供に。

その夫婦は、まだ妖怪に会ったことは無かった。

そのせいだろう、特に注意しないで森に行つてその子供を捨てようとしたのは。

その夫婦は慧音の目をわざわざ盗んでまでその子供を捨てに行つた。

その結果・・・子供はおるか、夫婦すら戻つてこなかった。

その後慧音はその夫婦が行つたと思われる森に向かった。

そして探したが、見つかったのは血にぬれた場所だけだった。

そこには死体はおるか骨すら残つてはいなかった。

慧音はそのときのことを思い出していた。

自分は、何も出来なかった。

そのことを今もただ悔やんでいるのである。

慧音は夫婦が赤ん坊を森に連れて行く前に、その赤ん坊を一度だけ見たことがある。

その赤ん坊は、確かに普通の赤ん坊とは違った気を放っていた。

それよりも、慧音はその赤ん坊の目を今でも覚えていた。

あの目は、なにもかもを見透かしている・・・そんな目だった。

慧音が過去のことを思い出しているとき、近くから子供の叫び声が聞こえた。

慧音はその声を聞くと壁に立てかけていた刀を持って急いで外に向かった。

そこでは、人里の中で一匹の大きな体をした妖怪が一人の子供を手

につかんでいた。

「子供の肉つていいよなあ、やわらかくてうまいからなあ。今日早くも紫も用事で出かけてるみたいだし安心して子供を食べれるぜ」
妖怪はそういうと大きな口で子供を食べようとした。

しかし、それは叶わなかった。

なぜならその妖怪の腕は切り落とされてその切り落とされた腕には子供はいなかったからだ。

「ぐ、ぐあああああ！俺の腕がああああ！」

のた打ち回っている妖怪の前には、慧音ではなく紅白の変わった形をした神主服を着ている子供がさっきの子供を脇に抱えて立っていた。

その子は脇に抱えていた子供をおろすと。

「離れてろ」

と一言言った。

子供はその場から離れていった。

「ぐ、貴様」

妖怪は切れた腕をその傷口につけた、するとその腕はもぐもぐついて動くだけに回復していた。

そのとき、慧音がやってきた。

「こ、これは？」

慧音は今まで見たことの無い種族に不思議に思っていた。

しかも、近づいただけでかなりの妖気を感じた。

おそらくそれほど強い妖怪なのだろう。

そしてその妖怪に向かい合わせ担っているのは一人の子供だった。

「あなた、下がっていなさい。ここは私が」

慧音は子供を後ろに下がらせようとした。

しかし、その子供は慧音の言うことを聞こうとはしなかった。

しかもそれとは逆に、

「・・・邪魔だ、下がっていきなさい」

とそう言った。

慧音はその子供がさっきの言葉を言ったために慧音に顔を振り向いたときにその子供の目を見た。

その目は、あのとときの赤ん坊と同じ目だった。

「もう話は済んだかよ、遺言はなあ！」

妖怪は待ちくたびれたのか、拳で子供に攻撃を仕掛けてきた。

その子供は上に飛び上がったその攻撃をよけた。

妖怪はすると子供に向かって口から火を吹いた。

しかし、子供は横に飛んでよけた。

どうやら、あれは脚力でジャンプしたのではなく能力が何かで空を飛んだようだ。

妖怪はそれに気づくと手を前に突き出した、すると手のひらからは強力な雷が広範囲に降り注いだ。

子供、・・・博麗黒夢は少し焦っていた。

それは人里を襲ってきた妖怪が意外に知性を持っていて、攻撃のバリエーションも多かったことにだ。

それに加えてかなりの回復の早さを持っている。

これでは並大抵の攻撃は通らないだろう。

「（しょうがないな、この技はかなりの霊力を消費するから使いたくなくったんだけど）」

黒夢は懐から一枚の札を出した。
そして、

「霊符『静止の世界』」
すると・・・周りの動きが止まった。

まず黒夢は止まっている雷をすり抜けた。
それで1秒経過。

そして黒夢は懐から一枚の札を出す。

「霊符『霊破槍 砕』」
すると黒夢の手のひらに一つの槍が出現した。

そして、その槍をその妖怪の口に投げつけた刺さる寸前でその槍は動きを止める。

さらに黒夢は札を5枚その妖怪の周りに貼り付けた。

「霊符『多重結界 瞬』」
すると妖怪の体は霊気に包み込まれた。

これで4秒経過。
そして漏れ息で作った槍で雷を打ち消して元の位置に戻った。

5秒経過。

「・・・静止は終わる」
するとすべての動きが再び始まった。

妖怪の口には霊破槍が刺さり結界によって仕切られた場所の爆発を食らった妖怪は悲鳴をあげる暇もなく消滅した。

慧音たちは何が起こったのかわからなかった。

黒夢が使ったさっきの札は、いわば擬似的に時を止める札。

黒夢の干渉されなくする程度の能力を周りに展開し時の干渉を封じる。

しかし、この技は大幅に霊気を消費するため連発することは出来ず最大で5秒ほどしか時間をとめることはできない。

・・・今の黒夢は最大五秒しか止めれない。

「くっ・・・」

黒夢は地面に着地すると少しふらついたが立っている。

慧音は黒夢を見ていた。

黒夢の目は、さっきと変わってはいなかった。

「・・・あとは、頼むぞ」

黒夢はそういうとふらつきながら神社に帰っていった。

みんな、何も言うことはできなかった。

だが、その場でみんな・・・黒夢の強さを実感したのは確かだ。

後日、黒夢は人里にやってきてある結界を張っていた。

その結界は妖怪や人間誰でも入れるがある規制をされるという結界だ。

それは、力の規制。

あらゆるものの力が弱体化する。

だが、黒夢は慧音にある札を渡した。

その札を持っている限り、結界の効果を受けないらしい。

黒夢が帰ろうとしたとき、慧音は10年前の事を聞こうとしたが、やめた。

代わりに一言こう聞いた。

「お前は、幸せか？」

黒夢はいきなりそんなことを聞かれてよくわからないという表情をした。

その顔は年相応な表情だった。

そして、

「ああ」

と一言答えて返っていった。

慧音はその一言で十分感じられた。
10年前の傷が、少し和らいだ気がした。

過去番外編 博麗、あらわる（後書き）

後半から話がぐちゃになりました。

ちなみにあの時止めは消費がかなり悪いので使わないことが多いです。

第十七話 鬼ノ異変 魔砲

勇儀は魔法使いは苦手だ。

正々堂々の勝負を望んでいる勇儀にとって事前に準備するなど言語道断。

多少ならともかくそれが確実に勝つためと言うことが気に食わないのである。

今回勇儀が苦手な雷鬼にいわれてここに来た理由も、最強の人間と戦えると言われたからだ。

だが、その最強の人間と言われた博麗黒夢は今木の下で気絶している。

確かに普通の人間よりは霊気はあるが、それでも自分に勝てるほどではない。

そう勇儀は感じていた。

そして、倒したと思って油断していたのが一番まずいことだったのだろう。

佳奈美は正直苦戦していた。

鬼の圧倒的な力の前にやられそうになっていた。

勇儀のこぶしが当たるときに、黒夢が事前に渡しておいてくれた札によって現れた防御の自動発動結界が無ければ間違いないやられていただろう。

そして、ために時間がかかるこれ（・・・）を発動できずにやられていただろう。

「・・・マスター・リザスター」

すると勇儀の斜め下に向かってかなりの勢いで虹色をしたレーザーが放たれた。

勇儀はその勢いで空に吹き飛ばされた。

そしてしばらくすると勇儀は地面に落下した。

佳奈美の手には一つの石が握られていた。

さっきの技はこの石から放たれたようだ。

佳奈美は息を切らしながらその場に立ち上がった。

そのとき、倒れている勇儀の指が少し動いた。

そして勇儀はゆっくりとふらつきながら立ち上がった。

佳奈美は目を見開きながら勇儀の様子を見ていた。

勇儀は一步踏み出そうとしたが、その場で倒れそうになった。

佳奈美は勇儀の手を掴んだ。

「・・・なんで、わざわざ倒した奴に手を貸すんだ」

佳奈美はそう聞くと微笑んだ。

「私は、貴方と勝負したことでまた強くなれたと思う。だから、これはその敬意の証」

そついうと佳奈美は呪文を唱えた。

すると、勇儀の傷がみるみるうちに治つていった。

「私の能力は、精霊魔法を使う程度の能力。精霊たちの力を借りてその傷を治した」

勇儀は傷のあつたところを触って調べた。

どうやら本当に治つているようだと確認すると佳奈美の方を見た。

その目は、遙か昔に見た・・・一人の陰陽師の目に似ていた。

それと同時に、佳奈美の力を感じた。

佳奈美自身は自分のことを弱いと思つていようだが、それは違う。彼女は十分に魔法使いとしての素質を所有しており魔法での物量戦ならおそらく黒夢にも勝るだろう。

だが、彼女の周りには参考となる魔法使いが存在しない。

その所為か戦い方の違う黒夢や妖怪たちと比べている所為で自分が弱いと思つていだけである。

勇儀は魔法使いと戦ったことは片手で数えるぐらいしかないが、それでも彼女の力が凄まじいものだと感じていた。勇儀は、笑顔を見せながら佳奈美に話しかけた。

「傷を治してくれてありがとう。それと、・・・思っていたより楽しかったよ！あなたとの戦い」

そう言うと佳奈美きよとんと目を丸くしていたがすぐに、

「ええ、私も！」

と言って、黒夢のところに向かった。

勇儀はそれを見ると、突如後ろに感じた爆発音に気づいた。

それは人間に感じ取れないような音だった。

そしてその音は、佳奈美の方に向かっていた。

勇儀はそれに気づくと自分の脚力で佳奈美のところへ移動し。

「危ない！」

と叫んで佳奈美をその位置から押しつけた。

すると、その位置に残ってしまった勇儀にその音の正体である直視するのも難しいほど細かく分かれた雷当たるとは思わなかった。

だが、勇儀がその雷に当たる寸前に一枚の札が雷の前に投げられた。

そしてその札から霊気が噴出すと、強固な霊気の壁となってその雷の攻撃から勇儀を守った。

「これは・・・？」

勇儀は何が起こったのかわからなかった。

すると、木に背を置きながらたっている一人の男が目に入った。

「・・・ちっ、気にくわいな。用が済んだら用済みってやつかよ」と言っただけでもより目を鋭くした黒夢がいた。

そして彼の右手には複数枚の札が持たれていた。

勇儀はまた、あの陰陽師と同じ目をした人間を見た。

そして、あの時・・・霊気の壁が出来る瞬間に黒夢のいる方から感じた爆発的に増えた霊気感覚が今は無いことを不思議に思っていた。

「さて、とにかくあつちがどうなっているか気になるな」

そついでと黒夢は萃香たちの方を見た。

第十七話 鬼ノ異変 魔砲 (後書き)

次回は、萃香たちの話です。

ちなみに佳奈美が勇儀と戦っているときと同時刻の話になります。

第十八話 鬼ノ異変 酒呑童子

佳奈美が勇儀と戦っているとき、華扇と萃香は博麗に援護しに行くのを阻まれていた。

「・・・私を倒さないと、先には進めない」

博麗はそうつぶやいた。

声を聞いただけでも、彼女は只者ではないと言う雰囲気を出していた。

それは鬼の四天王である華扇と萃香が一番よく知っている。

「（博麗と霧雨・・・たしか雷鬼の側近だったね。さて、なら）私が行くよ」

そついうと萃香は博麗の前に向かった。

「萃香、私も」

華扇は萃香を援護しに行こうとしたが萃香は首を横に振った。

「華扇はさっきの戦いで妖気をかなり消費したんだから、ここは私に任せなさい」

華扇はいつもとは違う雰囲気を出している萃香を見ると、言うことをやめた。

おそらく承諾したのだろう。

萃香はそれに納得した様子で博麗と向かい合った。

「・・・じゃあ、はじめようか」

「ええ、そうね」

博麗はそついうと一瞬で萃香の近くに近寄っていた、それは速さと呼ぶには異常すぎたものだった。

萃香はそれに気づくと博麗に殴りかかろうとした。

だが、気づいたときには自分の体が衝撃で後ろに飛ばされていることに気づいた。

「これは？」

萃香自体あまりダメージは無かったが、何が起こったのかわからな

かった。

「その程度で驚いていたらきりが無い」
すると博麗は萃香の背後に立っていた。

そして再び萃香に衝撃が走った。

しかも今度は自分の背中に衝撃がきていた。

「(さっきのは普通の攻撃のスピードじゃない。となると、まさか能力?)」

萃香は再び博麗の方にむいてこぶしを構えた。

そして今度は萃香が博麗に近寄った。

「三步壊廃」

そして技名を言うと萃香は能力によって巨大化し、博麗に殴りかかった。

「一步!」

萃香は博麗に向かって右こぶしを放った。

博麗はその衝撃によって地面に押しつぶられた。

「二歩!」

だが萃香の攻撃はまだ終わらない。

また博麗のいる場所を殴った。

「三步!」

そしてとどめといわんばかりに強力なこぶしを放った。

地面にはクレーターが出来上がっている。

萃香は元の大きさに戻ってこぶしで殴ったところを確認した。

そこには・・・博麗の姿は無かった。

「博麗の姿が無い!?まさか萃香の四天王奥義をよけたというの?」

萃香はクレーターの出来た箇所を見て不思議に思った。

いくら巨大化していてもその場にいる博麗の姿を見失い攻撃をはずすことなんて・・・ありえない。

そう思っていた。

萃香は鬼の四天王である。

その所為か他の鬼達の能力を知っているのだが・・・二人だけ知ら

ない。

一人は雷鬼、そしてもう一人は・・・博麗だ。

正直その能力が何なのか分からない限り萃香に勝ち目は無い。

すると、萃香は背後に向かって裏拳を放った。

その攻撃は何かの残像をきったように見えた。

しかし、何の感触も無い。

そして同時に萃香は気づいた。

なぜ博麗が自分の攻撃をいとも容易くよけて見えない攻撃を食らわしたのか。

正確には、反応できなかった攻撃だ。

「まさか、加速させる能力だったとはね」

そう、萃香が思いつくのはこれしかない。

攻撃を加速させて見えないうちに攻撃をあて、加速することで瞬間移動でもしたように近づいたりするのもこれで説明がつく。

「へえ、よくわかったね」

すると萃香の目の前には博麗が立っていた。

「あなたの思っている通り、私の能力は時を加速させる程度の能力を所有している」

「・・・その能力、もしかして最初から持っていたものじゃないの？」

博麗が自分の能力を話した後に、萃香はそう聞いた。

時を加速させる・・・そんな能力があればおそらく鬼の四天王の地位には入れたらだろう。

なのに入らなかつた・・・いや、入れなかつたのだろう。

自然に手に入れるには重過ぎる能力。

萃香にはそう思っていた。

「・・・まあ、その通り。この能力は雷鬼から受け取ったもの」
萃香は受け取ったという言葉に疑問を持っていた。

能力を渡すなど聞いたことの無いからだ。

もしかしたら何らかの能力を発現させる能力でも雷鬼は持っている

のだろうか？

萃香は深く考えたがよく分からなかった。

「話はこれで終わり。時よ加速しろ！」
すると再び博麗の姿が見えなくなった。

萃香は今の状態を切り抜けるために打開策を考えることにした。

「（博麗はおそらく今は自分のときしか加速させることは出来ない。出来るなら今時を加速させて自分だけがさらに早く動けば止めをさせれるから）」

だが、それをしないということはまだ完全に能力がなじんではない・・・もしくはコントロールすることが出来ないということになってしまう。

萃香は狙う隙はそこしかないと思った。

正直速さだけなら簡単に負けてしまうだろう。

それにくわえて鬼の力に速さを加えれば、とてつもない破壊力を持つ。

萃香は、勝つ方法を決めた。

萃香は鎖を振り回した。

だが、それはすぐによけられてしまう。

しかし、その鎖は周りの木に絡みついていく。

気づけば周りは鎖につながれていた。

「この範囲なら動けるところは限られる。そして動いた場所を殴っていけば私の勝ち」

萃香は鎖の中心に立っている。

たとえばどこから来ても鎖の音によってどこにいるかは判断できる。

早くてもこの鎖から離れようとする鎖の周りに張っている自分の体の一部の霧によって離れようとしたら攻撃を食らう。

「（さあ・・・どうするかな）」

萃香はいつでも博麗が来てもいいようにごぶしを構えた。

第十八話 鬼ノ異変 酒吞童子 (後書き)

博麗の能力がどこかで聞いたことがあるだつて？

気にすることhはいすいません。

元ネタはおそらく分かる人は分かるブツチ神父のスタンドのメイド・イン・ヘブンです。

検索すればでてくると思うよ！

今回は萃香 vs 博麗の続き。

過去番外編 その式 空を駆ける神主を追うもの

気づいたときには、彼は私より高く飛んでいた。それはたとえじゃなく言葉のままの意味である。

彼は空を飛んでいた。

まるでそれが自分の役割であると見せ付けているかのよう。そんな彼と知り合ったのが少し前。

親からの紹介だった。

私はうれしかった。

いつも自分より高みにいる彼が私と同じ高さにいることを。でも、それだけじゃ足りない。

彼のことを十分理解するには足りなさ過ぎる。

だから私は……

「うーん……うーん……」

私、霧雨佳奈美は一つの本を見ていた。

それは世間一般で魔道書といわれているもので、その魔道書の中でも初歩中の初歩の魔道書だ。

でも、今の私には殆ど読めない記述ばかりだった。

ちなみのこの本は黒夢のお父さん（コルテス）から貰った物。

何でこんな本を持つてるのって聞いたら、気にするなってはぐらかされたけど読めればいいと思ってもらってきた。

でも、魔道書はある程度の魔力……もしくは才能がなければ読めないらしく唯一読めたのは飛行の魔法の記述だけなんだよね。

「ま、まずは空を飛べるようになってからでいいよね！」

私はまず空を飛ぶ練習から始めることにした……んだけど。

「えーと、宙に浮くような感じで呪文を唱えて？」

思った以上の空を飛ぶだけでも難しかった。

練習してるけどせいぜい1、2秒少し浮くので限界だった。

「(やっぱ、才能ないのかな)」

私は内心かなりへこんでいた。

でもこの程度でくじけてるわけにも行かない！

そう思った私は再度挑戦しようと思った。

でも、このままじゃ飛ぶのには時間がかかると思った私は道具を使うことを思いついた。

ちなみに道具を使うことを思いついたのは黒夢のお父さん(やっぱコルテス)が持っていた・・・マンガとか言うのを読んだからだけだ。

「やっぱあの本に載ってた箒や杖がいいよね！」

私は早急に家の中にある箒を取ってきた。

杖は・・・後で黒夢のお父さん(またまたコルテス)に何とかしてもらおう！

「う・・・うー」

何とか箒にまたがって浮くのには成功したけど・・・思っていたより不安定。

これじゃあ空をまともに飛んでたら落ちちゃうな。

まだ黒夢と一緒に空を飛ぶのは無理かな。

時間はかかるかもしれない。

・・・けど、あきらめるつもりは無い。

（一カ月後）

黒夢はいつもどおり、幻想郷の見回りをしていた。

何か異変が有ればすぐにわかるからだ。

それに加えて何か変化があったら紫に伝えるためでもある。

そのために黒夢は空からその様子を見ているのである。

だが、黒夢はそのいつもしている空を飛んでいることが人間では普通出来ないことを知っている。

黒夢は空を飛ぶたびに、自分が異質であることを感じている。

「・・・はあ、早く帰るか」

今日は適当に終わらせよう。

黒夢はそう思いながら空を飛んでいた。

すると、

「コーくむ！」

佳奈美に声をかけられた。

「佳奈美？・・・って、ここ空の上だよな」

黒夢は振り返って佳奈美を見た。

佳奈美は箒にまたがって飛んでいた。

「いやー、ここまで上手く飛ぶの結構時間かかったね。でも

ほかの魔法も少し筒覚えっていつてるとこだよ」

黒夢は驚いていた。

黒夢が飛べるのは能力の応用で飛んでいるだけである。

別に格段に空を飛ぶだけのために努力したというわけではないのである。

そんな黒夢は心の奥底では努力しても飛べないと思っていた。

けど、佳奈美は努力をした結果空を飛ぶということに成功した。

「・・・なんだ、人間だって出来るんじゃないか」

黒夢はそうつぶやいた。

佳奈美には聞こえなかったようだが。

「黒夢！これから二人で見回りしようね！」

そう笑いかけながら黒夢に手を差し出した。

黒夢は少し動揺したがぎこちなく笑った。

「・・・ああ」

そう一言言って佳奈美の手を握った。

過去番外編 その弐 空を駆ける神主を追うもの（後書き）

黒夢の精神があまり人間離れしなかったのは佳奈美がいたからだ
というのを説明した話のようなものです。

・・・かなり書きづらかったです。

やっぱ、三人称で書くほうが楽ですね。

第十九話 鬼ノ異変 信頼

「（さあ、どこから来る）」
萃香は博麗が来るのを待っていた。

いつでも攻撃できるように構えながら。

しかし、博麗は萃香の予測しなかったことを行った。

博麗は周りにある木を根っこごと引き抜くとそれに能力で速さをふかして萃香に投げつけた。

萃香はそれを裏拳で吹き飛ばした。

その隙に博麗は萃香の背後に回りこみ拳を繰り出した。

「（勝った!）」

しかし、勝ちに急いだことが隙を作ってしまった。

萃香の裏拳で吹き飛ばされた大木がさらさらと霧のようになって消えた。

そして次の瞬間、博麗の前に霧が集まってきた。

その霧は一瞬で元の大木に戻った。

大木が壁になり博麗の拳は大木だけしか切ることが出来なかった。

そして切れた大木突如博麗の前に飛んできた。

大木が切れたのを見た萃香が拳でそれを殴って博麗のほうに飛ばしたのである。

「しまった!」

博麗は再び能力を使おうとしたが、間に合わずにそのまま木に当たってしまった。

だが、鬼の耐久力があるためこの程度では倒れなかった。

だがそれは萃香だってわかっていることだ。

萃香は自分の拳を霧にするとそれを木で前が見えない博麗に向かって放った。

博麗は萃香の攻撃によって腹に風穴が開いた。

博麗は腹部から大量の出血をしながら地面に倒れた。

「・・・あなたの能力が、もつと使い慣れられていたら倒れていたのは私かもね」

萃香はそういうと鎖を解いた。

「・・・止めを刺さないの・・・」

そういつた博麗に萃香はこう言った。

「私はあなたを殺しに来たんじゃない。ただ、あの男が面白いからあの男についていつているだけ。あなたにもいるんでしょ、そういうやつが」

博麗はなぜか雷鬼が頭に浮かんだ。

博麗はすると気を失った。

萃香はそれを見ると黒夢たちの方に向かった。

「あゝ、やっと終わったか」

「いきなり気絶したやつに言われたくないね」

「まったくそのとおりだよ」

「確かにそうですね」

「ぐっ・・・」

黒夢は三人に気絶していたことを言われずいぶんと参っていた。

こんな様子で雷鬼を倒せるのだろうか・・・

ちなみに勇儀は博麗の治療のために博麗を地底に連れて行ったらしい。

ともかく、黒夢達は雷鬼のいる洞窟の中を歩いていた。

「・・・それにしても暗いな、誰か明かりを持つてるか？」

黒夢は何とか話を逸らそうとしてそういつた。

確かに洞窟の中は光が通っていないようで真っ暗だった。

黒夢は霊気を超音波のように放って物の位置を把握しているから物

などに当たらずに済んでいるが、正直明かりがあったほうが動きやすい。

「え、別に私はこのままでいいけど」

佳奈美はそういいながら黒夢の手を握っている。

華扇はさつきから佳奈美の方をにらみつけている。

萃香はその様子を見るとため息をついた。

「（まったく、ここがどこかわかってるのかな。．．．それにしても、私たちすら雷鬼の能力がなにかは知らない。．．．能力を持っていなかったら話が早いんだけど、そんなわけは無いよね）」
萃香は博麗が言ったことが頭に残っていた。

『．．．まあ、その通り。この能力は雷鬼から受け取ったもの』

「（能力を受け取った？ いったいどういうことなの）」

一方黒夢も萃香との戦いで見ていたときの博麗の能力を思い出していた。

「（時を加速させる．．．か、確か父さんが持っていた漫画でそういうキャラがいたっけ。確か．．．）」

そのとき、黒夢は世界が色彩を失ったような感覚が起こった。

そしてその後黒夢にとって信じられないことが起こった。

「（．．．この感覚、まさか．．．時間が止まっているのか?）」

黒夢はこのとき、本能的にまずいと思った。

背筋が凍るような、恐怖に近い感覚を感じていた。

黒夢は常時能力を展開しているおかげで時の止まった空間でも動くことが出来た。

だが、ほかのみんなは違う。

もし時を止められたまま体をつぶされたり切断されたりすれば。

よければ重傷、悪ければ死んでしまうだろう。

黒夢はその最悪の結果が起こるかもしれないという勘が働いたことで、体を動かすことができた。

黒夢が後ろをむくろそこには！

金髪の髪をした、額に角らしき物がはえた体つきのいい男が立って

いた。

その男はまるでわかっていたかのように黒夢の方を見ながら笑っていた。

そして、黒夢はこの男の見た目に何か心当たりがあった。

「（偶然か？・・・それとも）」

黒夢は少し迷ったがすぐに行動に移した。

佳奈美の手を離してみんなを安全なところに移動させると男に霊破槍を投げつけた。

しかし、その槍は投げた後に速度が減速していき男に届く前に動きを止めてしまった。

「ちっ！（やはり時間が止まっている間は直接攻撃しないと無理か）」
黒夢は手の中に霊破槍を作った。

そのとき！

「・・・しょうがない、そして時は動き出す」

時が、動き始めた。

どうやらもう限界だったようだ。

時が動き始めた瞬間、萃香たちはいきなり自分の位置が変わっていたので急いで気配のするほうを向いた。

萃香と華扇はそこに立っている男を見ると目つきを変えた。

「・・・雷鬼」

黒夢はそのとき初めて目の前に立っている男が雷鬼だと理解した。

黒夢は初めて、このような妖怪に会った。

こんなにもどす黒く、野望を持っている妖怪が・・・幻想郷にいるとは考えもしなかっただろう。

黒夢は、同時に目の前の男に悪意がないことに気づいた。

普通は悪いことをしていると自覚して起こすことなのだろう。

妖怪にも多少は悪意を感じる。

敵対しているならなおさらだ。

なのにこの男からは悪意をまったく感じなかった。

つまり、悪と自覚しないで行動していることになる。

・・・それがたとえ、自己満足のものだとしても。

「お前は、俺が見てきた中でも見たことの無い・・・吐き気を催す
邪悪だな」

黒夢がそういつと雷鬼は不気味な笑いを浮かべた。

この場にいる全員は、それを見ると全員背筋が凍りつくような衝動
に陥った。

そして、突如雷鬼が一瞬で萃香の前に現れた。

「これは博麗の能力の!？」

萃香はすぐに身構えたが雷鬼は手刀で腕ごと切り落とそうとした。

だが、突如世界の色彩が失われた。

すると全員の動きが止まっていた。

・・・一人を除いて。

「霊符「静止の世界」」

黒夢が自身の能力を使って時を止めたのだ。

しかし、時を止めたら時を止め動いていた雷鬼も動くのでは・・・
だが、雷鬼は動いていなかった。

「・・・やはり、何らかの方法で能力を使い分けているようだな」

黒夢はさっきの博麗が受け取ったといわれた能力を見た瞬間そう勘
付いたのだ。

発動する瞬間、少しタイムロスがある静止の世界だが、今回は何と
か発動する瞬間を早めたことで間に合った。

黒夢は萃香たちを別の場所に移動させると霊破槍を手に出現させた。

「（残り2秒か!）」

黒夢は霊破槍で雷鬼の頭を貫こうとした。

そのとき、雷鬼の目が少し動いてこちらを見たような気がした。

「!？」

黒夢は驚いてつい霊破槍の動きを止めてしまった。

しかもそこで時間切れになってしまった。

そのまま、黒夢は手刀で斬られそうになったが霊破槍をその腕に投
げつけた。

腕に刺さって一瞬動きが鈍くなったのを見ると黒夢は能力を使った。能力によって時の加速が無効化されたが雷鬼はお構い無しという感じで手を振り落としてきた。

黒夢は左側に身をそらそうとしたが右腕に雷鬼の手刀をもろ食らってしまった。

黒夢の腕からはいびつな音が聞こえた。

「ぐっ……このっ！」

黒夢は腰からお払い棒を抜くと霊気を通したお払い棒の紙で雷鬼を切りつけた。

雷鬼は後ろに下がったため少しかするだけで終わってしまった。

そしてそのため黒夢の非干涉空間の範囲外に出てしまった。

雷鬼はそのまま洞窟の奥に向かっていった。

「黒夢！大丈夫？」

佳奈美は急いで黒夢に近づいていた。

黒夢は痛みへの干渉を断ち切って痛みを感じないようにしていたが、腕が動かさなくなっているのはわかっていた。

佳奈美は急いで魔法で腕を回復させようとした。

黒夢は魔法で回復させるために能力を解いた。

すると突如痛みが襲ってきた。

「っあ！？」

正直気絶しそうになったが耐えていた。

佳奈美はその様子を見て心配しながらも傷を治すのに専念していた。萃香と華扇は心配しながらも雷鬼が向かった洞窟の奥を見ていた。

「……なんであいつ奥にいったんだろう？もう少しで止めをさせたのかもしれないのに」

「確かに、それは気になるね」

萃香たちはそのことを考えていた。

そのとき、

「それは……っ」

黒夢が口を開いた。

「黒夢、今はしゃべらないほうが！」

華扇は傷を治している黒夢にあんまりしゃべらないように言ったが、黒夢は関係無しに言った。

「あいつは・・・自分の能力を無効化する俺を警戒しているからだ」
黒夢はそう言うのと左手で痛みで落としたお払い棒を拾った。

「おそらく・・・奥に行つて俺を殺す準備でもしてるんだろつよ」
萃香と華扇はそれを聞くと気に入らないという様子をしていた。

鬼は卑怯なことが嫌いなものだから当然といえば当然なのだが・・・

「（もつとも、やつは何か焦っている様子をしていたから・・・何らかの準備を急いでいたのか？もしくは・・・）」

黒夢は華扇に腕を治してもらいながら考え込んでいた。

正直、まだ雷鬼の能力はわかっていない。

だがこのままほおつて置いても幻想郷に何らかの被害をもたらすのは目に見えている。

黒夢はそう考えるとやることが決まった。

「あいつは、俺が倒す」

そついうと黒夢はその場から立ち上がった。

佳奈美はまだ治療を続けているが、まだ時間がかかりそつなのを見ると黒夢は治療をやめさせた。

「黒夢！・・・」

治療をやめさせたの怒ろうとしたが、怒れなかった。

なぜなら今の黒夢の目は・・・博麗の神主としての目だったからだ。黒夢は左手で懐から札を出してそれを負傷している右腕に貼り付けた。

すると、右腕を多少は動かせるようになっていた。

「・・・正直ここからはかなり危険だ、あいつの能力もわかってないから・・・下手したら死ぬかもしれない。それでも来るなら俺は止めない。来ないなら来ないで俺はかまわない」

黒夢はそついうと洞窟の奥に向かおうとした。
すると佳奈美は黒夢の左腕をつかんだ。

「・・・私は行くよ、役に立たないかもしれない。でも黒夢が一人頑張っているのに私だけ残るなんて出来ない」

すると、華扇のほうも黒夢の方に来た。

「あいにくだけどここまでやって戻っても雷鬼に何されるかわからないからね。それに、黒夢はいつも無茶するからついていけないから不安なんですよ」

そういうと華扇は黒夢を見ながらため息をついた。

しかし、その表情は笑っていた。

萃香も二人の様子を見るとため息をついた。

「まったく、ここまで着たらついていけないと駄目みたいじゃないか。それにアンタにつくことにしたんだからもう離れたりはしないさ。鬼は素直なやつの味方だからね」

萃香はそういうと笑い出した。

黒夢は三人を見て少しあきれた様子でいたがすぐに顔を赤らめて、

「そうかよ、じゃあ好きにしろよ」

と一言言うと一人洞窟の奥に向かった。

佳奈美たちも黒夢の後を追った。

「（・・・それにしても、さっきの時止めでかなり靈気をつかっちゃったな・・・あれ（・・・）を使わなきゃならなくなるかもな）」

黒夢はそう思いながら洞窟の先を進んでいた。

よくわからない、予感も感じながら。

第十九話 鬼ノ異変 信頼 (後書き)

今回は思ったよりは長くなりました。

次回からは雷鬼との戦いです。

え？雷鬼の見た目？

・・・まあ、DIOですね。

服装はもちろん着物ですよ！

どう考えても外人顔ですが気にしないでください。

第二十話 鬼ノ異変 雷鬼の能力

洞窟の中をしばらく進むと大理石でできた床が見えた。

この時代に大理石をわざわざ用意してくるとは、めずらしいことだった。

「相変わらず雷鬼のいるところはすいぶん豪華ですね」
華扇は少し気に入らなさそうに言った。

黒夢の方は大理石で出来た床や周りの壁を見ていた。

ここらは先ほどまで歩いていて道よりもかなり違っている。

黒夢はこの先に雷鬼がいるとなんとなく確信していた。

これもおそらく黒夢の勘なのだろう。

そのとき、周りに変化が起きた。

再び周りが動かなくなつた。

しかもそれだけじゃない。

なんと周りが崩壊し始めた。

だが黒夢を含むみんなはその場で立っている。

まるで透明な足場でもあるかのように。

そして、黒夢が見た先には・・・雷鬼が立っていた。

「雷鬼！・・・貴様、何をした」

黒夢は今の状態が時が止まったものでも時が加速したものでもないことに気づいていた。

それとは、次元が違うようなものだった。

黒夢は自分の手の中に霊破槍を作り出すとそれを雷鬼に向かって投げつけた。

しかし、なんとその攻撃は雷鬼をすり抜けた。

「すべての時は吹き飛ばす」

雷鬼はそのまま黒夢たちの後ろに回りこんだ。

「そして時は再始動する」

すると周りの景色が元に戻った。

黒夢は雷鬼の方を警戒しながら見ている。

「（時を吹き飛ばす、それがさっきの能力か。・・・やつは、さっきから“時”関連の力しか使っていないが・・・それだけでは能力の受け渡しの説明には不十分か）」

黒夢は左手でお払い棒を持って雷鬼に向かっていった。

すると雷鬼は突如右手を目の前で振った。

いや、正確には違う。

雷鬼に向かっていく黒夢には見えた！

雷鬼はただ腕を振ったわけではない。

その空間を削り取るのが目的だったのだ。

すると、突如佳奈美が雷鬼の方に引き寄せられた。

「（まずい！・・・くそ、後一回が限界だ！つうのによ）静止の世界！」

すると、周りの色彩が反転した。

再び時が止まったのである。

黒夢は佳奈美たちを安全な方向に移動させると雷鬼の右腕をお払い棒で切断した。

そして、黒夢は懐から札を出した。

「霊符「霊破槍 拡散」！」

すると札が青白く光った。

黒夢の周りにはたくさん霊気で出来た槍が浮かんでいた。

そしてそれはすべて雷鬼の方に飛んで行き当たる寸前で動きを止めた。

黒夢は雷鬼から少し距離をとった。

「・・・そして静止は終わる」

時は動き始めた。

「むう！？」

黒夢の霊破槍はすべて雷鬼の体に突き刺さった。

佳奈美達は何が起こったのかわからない様子だった。

すると、黒夢が突如にひざまずいた。

「黒夢!？」

住奈美は黒夢の方に近寄った。

「・・・かなり靈気を消費してるわね、右腕も負傷しているからこれ以上戦うのは無理よ」

萃香はそう言うと黒夢をかばうように黒夢より前に出た。

すると、黒夢は前に立った萃香の腕をつかんだ。

そして、次のことを言った。

「に・・・げろ」

萃香はそれを聞くと雷鬼の方を見た。

そこには、雷鬼の姿は無かった。

次に萃香が雷鬼の姿を見たのは・・・自分の腹部が雷鬼の左腕によって貫かれたときだった。

「な・・・」

「まずは貴様からリタイアだな、伊吹萃香」

だが、萃香は気を失う前に雷鬼の左腕に打撃を加えた。

しかしそれは青あざになった程度だった。

雷鬼はそのまま左腕を萃香の腹から引き抜いた。

そのとき、華扇の蹴りが雷鬼の腹部にめり込んだ。

しかし、雷鬼は微動だにしないで華扇のほうを見た。

だが華扇はそのまま雷鬼に殴りかかった。

その拳は雷鬼の右手につかまれた。

華扇はさつき黒夢が切り落としたはずの腕がもうくっついていてこれに驚いた。

「お前の拳、ぬるいぞ。来る前はかなり体力を消費したようだな」

雷鬼はそのまま華扇のわき腹に蹴りを入れた。

華扇は蹴りを入れられた勢いで壁まで吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「がはっ!？」

華扇は壁に叩きつけられた後吐血した後地面に倒れた。

「(くそっ・・・まだだ、まだあれには時間がかかる!)」

「さて、次は貴様　　ッ！」

黒夢に詰め寄ろうとした雷鬼に火の塊が当たった。

雷鬼は火の勢いで少し吹き飛ばされた。

「・・・よくも二人を」

炎の放たれた先には杖を構えた佳奈美が立っていた。

雷鬼は少しこげた右腕の傷の部分を左手で触れた。

すると、その傷が消えたかのように治っていた。

「傷が治った？それもあなたの能力の一部なの？」

佳奈美は杖を構えながら言った。

「・・・ふん、このままだとつまらん。能力でも教えれば貴様らでも少しは齒ごたえがあるようになるか？いや、そんなことはないか」
雷鬼は笑いながらそういった。

佳奈美の方は変わらずに雷鬼の方を見ている。

「冥土の土産ぐらいに教えてやるう。俺の能力は“パラレルワールド平行世界の自分の力を使う程度の能力”だ」

「パラレルワールド平行世界？」

佳奈美は今までパラレルワールド平行世界という言葉聞いたことがないから当然である。

「・・・選択肢を変えた、もう一つの世界。つまり“もしも”の世界が存在するという考え方だな」

黒夢はそういうとふらつきながら起き上がった。

雷鬼はそれを聞くと不気味に笑った。

「そう、つまり俺はその“もしも”の世界でいる俺の力を使えるんだよ！まさに支配する力ということだ！」

黒夢は雷鬼の能力に何らかの違和感を感じていた。

パラレルワールド平行世界はいわば選択肢の別の考え方のようなもの。

つまり何らかの方法で別の能力を持っていることは無いわけではない。

「（だが、さつき戦った様子から一度に使えるのは一つ。あれは同時に複数の能力を使うことができないということだな）」

「さて、これ以上無駄話をするつもりは無い」

雷鬼はそう言うのと右手を出した。

「帝王の末路！」

そう叫ぶとさつきと同じように世界が崩壊した。

おそらく時を吹き飛ばしたのだろう。

「さて、貴様は最後に消してやる。博麗黒夢」

そういうと雷鬼は佳奈美の方に行こうとした……だができなかった。

なぜなら自分の体が結界に閉じ込められていたからだ。

「何っ！？これは……貴様がやったのか！博麗黒……っ！？」

雷鬼は自分の体が動かないことに気づいて黒夢の方を見た。

だが、そこに立っていた黒夢は変わっていた。

それは、さつきより霊気は2倍3倍以上になっていたからだ。

「な……何が？」

雷鬼は時が吹き飛んだ空間で混乱していた。

時が吹き飛んだ空間、つまり自分が支配できる世界。

その世界に干渉するものはいない、そう思っていた。

だが、それは違った。

たった一人の異常者によってそれは覆された。

それが、博麗黒夢。

彼は他の平行世界パラレルワールドに存在しない存在。

少なくとも雷鬼が見た平行世界パラレルワールドでは見たことがなかった。

そんなことは普通ありえない。

何があるうと選択肢を変えた平行世界パラレルワールドが存在するはずが無いのである。

博麗黒夢の存在は、雷鬼の理解を超越していた。

だから雷鬼は黒夢を壊そうとしていた。

しかし、それは不可能に近くなっていた。

なぜなら雷鬼は黒夢の本気を出させようとしてしまったからだ。

「……やれやれ、この封印を解くのは久しぶりかな」

黒夢はそう言うと雷鬼に近づいてきた。
さつき雷鬼は佳奈美を始末するために触れる状態で時を吹き飛ばした。

そのせいで時を吹き飛ばした状態で動ける黒夢は雷鬼に触れることが出来るというわけである。

「じ、このー！」

雷鬼は帝王の末路を解除した。

すると周りの景色はさつきの状態に戻った。

佳奈美は雷鬼と黒夢の方を見た。

すると、雷鬼が札で構築された結界で動きが封じられているのを見た。

「あれって、ここに来る前に黒夢が用意していた札の・・・」

（数時間前）

博麗神社から出てから少し経ってから黒夢は札に使用する紙に何かを書いていた。

「黒夢？何書いてるの」

「ん？ああ、さつき萃香と戦ったときに思いついた札を書いてんだ」
黒夢がそう言うと萃香は気まずそうにしていた。

やはりまだ気にしているようだ。

「まあまあ、そんな気にしなくていいから」

黒夢は萃香にそっくりいながら札を書いていた。

「それって、どんな札なんですか？」

華扇は黒夢に聞いた。

黒夢は札を書きながら答えた。

「これはな、鬼対策用の札だ。そして、その効果は・・・」

「・・・鬼を束縛する結界を作り出す札」

住奈美はそうつぶやいていた。

黒夢の手の中には一枚の札があった。

どうやらあれが結界の発動トリガーだったようだ。

「八方鬼縛陣」

雷鬼はそれによって動きを封じられていた。

しかもその結界には微弱とはいえ黒夢の能力が付加されていた。

それによって雷鬼の能力を使っても削り取ることも時を操って効力を消すことも出来ない。

「ぐ・・・この」

雷鬼は自分の腕力で結界を割ろうとしたが結界はびくともしない。

「無駄だ、その結界は必ず一分間は動きを封じる。お前に抜け出す術は」

黒夢は左手の手のひらに靈気を集めていた。

そして靈気が集まると一つの青白い球体になった。

「ない」

その球体を黒夢は雷鬼に投げつけた。

球体は靈気を圧縮して出来たものだ。

もちろんそれを食らえば多大なるダメージを食らう。

その球体は雷鬼に当たると爆発を起こした。

「ぐあああああ!!」

雷鬼はその攻撃をもろくらって体が焼きただれていた。

そして結界の効力がきれたらしく、結界が消滅し雷鬼はそのまま地面にひれ伏した。

「ぐっ・・・ばかな、この俺が」

雷鬼は息を切らしながら立ち上がった。

だが、その足取りは黒夢よりも不安定だった。

「容赦はしない」

黒夢の手の中に霊破槍が出現した。

その霊破槍はさつきより、おおきくなっていた。

雷鬼はそれを見て焦っていた。

その霊破槍にも黒夢の能力が付加されており、能力で消したり時を止めたり吹き飛ばしても無駄だった。

それに加えて、雷鬼自身も黒夢の非干渉空間の射程内にいて能力も使えなかった。

「終わりだ」

黒夢の霊破槍は、雷鬼を貫いた。

雷鬼は吐血しながら気を失った。

第二十話 鬼ノ異変 雷鬼の能力 (後書き)

ついに決着!?

というわけで次回で異変編は終わります。

第二十一話 鬼ノ異変 終わり

最初から、一人だった。

気づいたときには一人だった。

俺はそれを当たり前と想っていたし、当然のことだと思っていた。

そんなある日、俺は能力に気づいた。

世界を支配できるほど多大なる力。

俺はそれに身を任せるのに後悔などしなかった。

なぜなら、最初から一人だったから・・・失うものなど無かったから。

平行世界パラレルワールドの世界を借りるたびに、俺は別の何かになっていくのを感じていた。

それが、平行世界パラレルワールドの自分だったのは最初からわかっていたことだ。

力を持っている俺がいたらもちろん、悪に染まるのはわかっていたからだ。

気づいたら、俺は俺でなくなっていた。

「・・・いき・・・雷鬼！」

俺が目を覚ますと、博麗と霧雨が立っていた。

どうやら気づいたときには俺は寝ていたようだ。

「雷鬼、もうすぐ博麗黒夢達が来る」

「私がまず片付けてきます」

俺は博麗達の言葉を聞くと指示を出した。

「わかった、しっかり仕留めてこい。博麗はもしやつらの残りが来たときのために俺が呼んだ勇儀と一緒に洞窟の入り口で待っている」
二人はそれを聞くと、すぐに出かけて行った。

俺もそれを見るとすぐに準備に取り掛かった。

俺がいるところは俺が絶対に勝つためにある仕掛けを施している。それは、俺の肉体強化。

そして妖怪のレベルをはるかに超える再生力を手に入れる場所だ。この場で戦うとき、俺は勝つことが出来るだろう。

おそらくあの二人は確かに強いが、やつらを止めることは不可能だろう。

だから、保険のためにこの場所を用意しておこう。

雷鬼は、腹部に靈気で構築された槍を刺されて倒れていた。

つまり、雷鬼は負けてしまったのである。

黒夢は雷鬼を見ていた。

佳奈美は華扇と萃香の治療を行っている。

二人は命に別状は無いようだ。

「・・・おかしい・・・なぜ、俺は負けた」

雷鬼は、かすれた声でそうつぶやいた。

それは離れたところで治療に専念している佳奈美には聞こえなかったが雷鬼の近くに立っている黒夢には聞こえた。

「お前は、自分の意思で戦ってなかったからな」

黒夢はそうつぶやくと雷鬼の方を見た。

雷鬼は黒夢の方を見るとため息をついた。

「・・・最初から、お前に勝てるはずなど無かったのだな・・・それで、まだ封印しているのだから」

雷鬼はそう言うと黒夢は少し驚いていた。

自分の力がまだ封印されているのに気づかれたからだ。

「驚いたな、まさか封印していることに気づかれていたとは。・・・」

まあ、お前の言うとおりであれば第五段階まであるうちで第二段階までの封印を解いた状態だ」

黒夢がそう言うのと雷鬼は驚いた。

あれで第二段階までの封印を解いた状態だと言ったからだ。

しかも、その言葉は嘘ではないと直感でもわかるほどだったからだ。

「・・・なぜ、自ら力を封印する」

雷鬼は黒夢に聞いた。

黒夢は少し悩んだが、今の雷鬼はこの世界の雷鬼だということがわかってるので話すことにした。

「自分の力で、自分の身を滅ぼしてしまうからな」

雷鬼は黒夢の言った事に疑問を持った。

自分の生命力といえる靈気で自分のみを滅ぼすということに。

「お前が疑問に思うのも無理は無いだろう。だが、俺は生まれたころから人間には荷が重い力を持っていた。この能力も、無意識のうちで自分の身を守るうとして生まれたものだろう」

黒夢はそう言うのと懐から一枚の札を出して雷鬼の腹部に刺さった靈破槍を抜くとそれを雷鬼の左腕につけた。

雷鬼は、これから自分は殺されるのだと思った。

こんなことを起こしたのだから当たり前だろうと思っていた。

大事にならなかつたのが運がよかつたほどだ。

雷鬼は目を閉じた。

だが、少し妙な違和感を感じただけでいつまで経っても何も起こらなかつた。

雷鬼は恐る恐る目を開けた。

すると、自分の体が萃香と同じぐらいにまで縮んでいた。

「な、なんだこれはっ!？」

同時に自分の力が弱体化しているのを感じた。

雷鬼は自分の左腕に赤色の布が巻かれているのに気づいた。

そこはさつき黒夢が札を貼ったところである。

雷鬼はそれを取ろうとしたが、触れることすらできなかつた。

「お前の力は強すぎて制御ができていないようだった。おそらくさつきのことも平行世界の自分の意思にのっとられかけて行ったことだろう。だから今はこのぐらいで許してやる」

黒夢はそう言うと言霊気の封印を施した後に左腕で雷鬼を持ち上げた。雷鬼は黒夢の腕の中でしたばた暴れているが出る事はできなかった。「さて、お前には選択肢がある」

黒夢は抱き上げて雷鬼を見た。

雷鬼はいきなり言われたことでビクツと反応した。

「一つは、このまま天魔に殺されるか。もう一つは・・・地底に行くことだ」

「地底だと？」

雷鬼は地底に入ったことは無いので当然の反応ではあった。

「地底には他の鬼も住んでいるからな、まあ勇儀に頼めば簡単に入れるだろう」

「ちよつとまで！なぜ俺が地底に行かなくては」

雷鬼は反論しようとしたが、黒夢と傷が回復した萃香たちにならまれて何もいえなかった。

「ぐっ・・・この雷鬼があああああ！！WRYYYYYYYY」

「（これがコイツの元の口癖なのか？）」

黒夢はそう思いながら雷鬼を抱きかかえながら洞窟の入り口のほうに向かった。

入り口のほうでは黒夢の予想通り、勇儀と博麗、そして霧雨がいた。

「やはり来ていたか、じゃあ話は早いな」

黒夢はそう言うと言雷鬼を三人に投げ渡した。

博麗と霧雨は二人で雷鬼をキャッチした。

「どうせ勇儀に地底に行くように前から誘われてたんだろ。だったら、そいつと一緒に行きな。俺も妖怪の賢者も天魔も止めはしないよ」

そう言うと黒夢は飛ばうとした。

すると、飛ぶ前に体がふらついて倒れそうになった。

なんとか佳奈美が黒夢の体を支えた。

どうやら封印をといた反動が今頃来たようだ。

黒夢の体は当たり前のごとく人間の体である。

だが、黒夢が所持している霊気はそれとは比例しないほどの量と回復力持っている。

つまり、さつき封印をといたときにその状態で使った霊気に加え、封印のときに使った霊気が回復したせいでその反動で体にダメージがきたようだ。

「っ……だが、次に同じようなことをしようとしたなら……今度こそ容赦はしないぞ」

そう言つと黒夢は佳奈美達に支えられながら雷鬼達から離れていった。

雷鬼はそれをずっと見ていた。

「……あいつは、強いやつだ。俺なんかよりもな。ふん、俺ももう少し生きてみたくなつた。あいつのような人間と会えるならな」
雷鬼がそういつたのを見て博麗たちはうなづいた。

「私達は、あなたについて行くだけです（雷鬼、縮んだな。……かわいいかも）」

「俺達はあなたに救われたのですから（雷鬼様、小さい）」

「よし、じゃあ案内するからきな！（雷鬼小さくなつたつてからかえるね）」

雷鬼はこのとき、自分の能力を使って心を読むことに成功していた。そしてその心の声がわかつているからこそ、雷鬼は苛立っていた。

「てゝめゝえゝらゝ！」

博麗たちは雷鬼の様子を見ると地底に向かって走り出した。

「待ちやがれ！」

雷鬼たちは地底に着くまでこの鬼ごっこを繰り返す羽目になつたとか。

「黒夢、さあ背中見せる」

黒夢たちはしばらく飛んでいたが人里に下りた。

その理由はもちろん、黒夢の怪我の治療のためである。

今の黒夢は右腕の骨折に打撲、血を流しての貧血、あばら骨のひびなどがあり・・・正直今まで動いていられたのが不思議なくらいの重傷だった。

そしてその黒夢を治療しているのが、慧音である。

慧音は黒夢の上半身の怪我を今は重点的に行っていた。

そして今は勇儀に吹き飛ばされたときに強打した背中の治療を行っている。

ちなみに黒夢は治療が効くように非干渉をしていないためかなりの痛みを襲われていた。

「（っあゝ！痛い・・・痛みで気を失いそうだ）」

そんなこんなで痛みを耐えていた。

しばらくすると基本的な治療は終わったようだ。

「さて、お前にはしばらく私の家に泊まってもらっぞ。療養のためにな」

黒夢はそれを聞くと顔をしかめた。

「おい、じゃあだれが代わりに妖怪退治をするんだ」

黒夢がそう言うときまで座っていた佳奈美と華扇と萃香が立ち上がった。

「・・・それは代わりに私達がするよ！」「・・・」

そう言うと三人は慧音の家からでていった。

黒夢は三人がいきなり言ってしまったので少しポカーンとしていたが、しばらくするとため息をついた。

「どうやら、いやでも療養しないといけないようだ。」

「・・・すまない、しばらく世話になる」

「人里ではお前には世話になってるからな、当然だ」

慧音はそういつと夕食を準備しに行った。

黒夢は布団に寝転がった。

ちなみに、右腕は骨折を治すために固定されているので当然動かすことはできない。

「・・・はあ、一ヶ月か」

どうやら黒夢の怪我は一ヶ月で治るようだが・・・どう考えても早すぎだ。

「（人間離れしすぎなんじゃないか？）」

慧音はそう思いながら夕食を作っていた。

半妖にこんなことを思わせる黒夢は、やはり（いろんな意味で）すごいのだろう。

第二十一話 鬼ノ異変 終わり (後書き)

雷鬼の能力説明

パラレルワールド
平行世界の自分の力を使う程度の能力

言い換えればつまりなんでもできる能力。

パラレルワールド
平行世界はもしもの数だけ存在するのでほぼ無限の能力を使えることとなる。

だが、使うときに精神力が弱ければその平行世界パラレルワールドの自分に意思をのっとられてしまうこともある。

今回の封印で能力はかなり弱体化し、一瞬(1、2秒ほど)時を止めたり4、5秒時を吹き飛ばしたりなどしかできなくなった。

次回から療養中の話になります。

天魔?・・・雷鬼に捕まっていました。

そして何といまだに出されてないという。

今回は異変から数日たった後の話です。

第二十二話 博麗黒夢は療養中！

「あー、暇だ」

そう言うと黒夢は布団の中から近くに置かれているせんべいを食べている。

黒夢は前回の異変での怪我を療養中なのである。

実のところ、黒夢が大怪我をしたのは初めてではない。

そして大怪我をするたびに黒夢は慧音の家で治療を受けている。

黒夢の家（博麗神社）には確かに治療用具は備え付けられているが、所詮応急処置ができる程度である。

最初はどこか専門の治療場所で治療しようと人里に行ったのだが、そのときは人里のみんなに黒夢は口では言われなくても嫌われていたので治療場所で治療を受けることはできなかった。

そんなときに、寺子屋に行っていた人里の子供達が怪我をしている黒夢を見て慧音のところに連れて行った。

慧音は黒夢が人里のためにも動いているのを知っていたため治療を無料で行うことにした。

というところだ。

人間は自分より上の人物はできる限り避けようとする。

博麗黒夢は人間の中でも破格の強さを持っている。

それを一部の人間は恐れているのである。

そして、人里の人間達は知らない。

博麗黒夢が、どれだけ命を駆けてこの幻想郷を守り通してきているかを。

まあ、今の布団の中でごろごろしながら暇だー、暇だーと言ってる姿を見てそんな強くて命がけで幻想郷を守っている人間には到底見えないだろう。

しばらくすると、黒夢の寝てる布団の部屋にあるふすまが開いた。ふすまの向こうには、慧音がいた。

「黒夢、帰ったぞ」

慧音はそういうと黒夢の枕元に座り込んだ。

「ああ、おかえり。・・・にしてもすまないな、お前は寺子屋の教師までしているというのに俺の世話まで」

黒夢は申し訳なさそうにしている。

慧音はそんなこと気にするなというように黒夢の傷の包帯を変えている。

黒夢もそれはわかっているようで黙って治療を受けていた。

慧音の家は庭のほうは森に面している。

そういう家はあまり好まれない。

なぜなら妖怪が来る可能性があるからだ。

だが、慧音は半人半獣である。

つまりそこらの低級や中級妖怪程度なら倒すことはまだできる（とは言っても幻想郷の中でもかなり強いという分類ではない）

だからこのような場所に家を設けて住んでいる。

あとはもう一つ理由があるのだが・・・

「慧音！いるか？」

すると、突如入り口のほうで女性の声がした。

その声は女性というよりは少女に近いものだった。

「妹紅か、すまないな」

すると、玄関から誰かが入ってきた。

そして部屋に白い髪をした少女が入ってきた。

「いいって、慧音が私に頼みごととしてくることも少ないんだし」

その少女は手に袋を持っていた。

「どうやら薬のようだ。」

「それにしても、こいつがああ博麗の神主か・・・」

少女は慧音に包帯を巻いてもらっている黒夢のことをまじまじと見ていた。

黒夢も少女を見て何らかの違和感を感じていた。

「・・・お前は？」

「ん？ああ、私は藤原妹紅」

少女、妹紅はそう言うと言つと慧音に薬の使い方は注意事項を話しに行った。

黒夢はしばらく二人を見ていたが飽きたのか布団に寝転がった。

しばらくすると、妹紅が薬を持ってきた。

黒夢はそれを受け取るといやな予感がしたがその薬を飲んだ。

そして、この後黒夢に薬を飲んだ後吐き気や頭痛、体中から痛みが襲ってきた。

「・・・おい、これは・・・なんだ」

黒夢は痛みには耐えながら慧音と妹紅に聞いた。

そして、妹紅はこう答えた。

「何って、体の回復を早める薬。ただ、早めてる間は体に大きな負担がかかってしまうのが困るけどね。それで三日もすれば治る」

黒夢は正直これなら時間をかけて治すほうがいいと思った。

慧音の方は止めれなくてすまないという表情をしている。

「（次は絶対この薬は飲まない）」

黒夢はそう心の中で決心した後、気を失った。

三日後、黒夢の怪我は信じられないほど治っていた。

折れていた骨も元通りにくっついており、博麗としての仕事も再開

できるほどだった。

だが、いまだに体に痛みが残っているのではらくはまた博麗の神主として働くことはできないらしい。

その間は黒夢は神社でいるといったが慧音に無理やり帰ろうとするのをやめさせられて今も慧音の家にいる。

それは、まだ痛みが残っている黒夢を一人にするのは危険だと考えたからの判断だった。

黒夢の方は断ろうとしていたが最終的には仕方なく了承した。

だが、黒夢は世話になっている間は家事は自分がするといった家事をしている。

そして、今日は妹紅が慧音の家に遊びに来ていた。

「慧音、そろそろできるから食器を運んでおいてくれ」

「ああ、わかった」

慧音は食器を持ってきた。

妹紅はその様子をひじを机に置きながら見ている。

そして、次に妹紅が言った事がまた一波乱起こすこととなる。

「なんか、夫婦みたいだな」

そのとき、周りの時は止まった。

精神的な意味だが。

慧音は赤面し、黒夢は何を言ってるんだという風な目で妹紅を見ていた。

「そ、そんなわけ無いだろう！妹紅何を言っている！！」

慧音は顔を赤らめたまま声を大きくしていった。

「俺とコイツが夫婦に見えるわけないだろ」

黒夢の方はいつもと変わらない様子で言った。

そして作った料理を更に盛るとそれを机の上に置いた。

「ん〜、でも普通に夫婦に見えたよ。黒夢が妻で慧音が夫という感じ」

再び周りと時が止まったようになった。

黒夢は眉がピクピクなっており、表情は陰に隠れて見えない。

慧音の方は少し苦笑いしていた。

妹紅は楽しそうに鼻歌を歌っている。

「・・・てめえ、死にたいらしいな」

黒夢はそう言うのと妹紅が食べる料理に七味唐辛子のはこの中身を全部入れた。

妹紅はそれを見るとからしを黒夢が食べる料理にしこたま入れた。

その後、二人はにらみあい硬直状態になっていた。

だが、次の瞬間！

慧音の頭突きが二人の後頭部に直撃した。

二人の顔はそのまま見るもむざまになつた料理に埋もれた。

「料理を粗末にするな」

二人は慧音の前では喧嘩をしないようにしようと思った。

ちなみに、黒夢は数日後に博麗神社に戻っていった。

そして、その帰りにあることを思い出した。

「あ・・・天魔のこと忘れてた」

天魔は雷鬼の異変のときから黒夢に情報を与えないように閉じ込められていた。

そして・・・

「おい、誰かいないかー！・・・誰か助けやがれ！！」

異変が解決しても閉じ込められていた。

その後、黒夢が助けに行つたのだが・・・数日天魔がいなかったの
で誰か心配しているかと思つたがいなかったことすら知られてな
かつたらしい。

それを聞いた天魔がへこんだのは言うまでもないことだ。

第二十二話 博麗黒夢は療養中！（後書き）

話的には異変後の日常話。

数日分をまとめて書いたので話が結構よくない結果に・・・
次はこんなこと無いようにします。

第二十三話 博麗黒夢の悩み（前書き）

書き方を少し変えてみました。
それと今黒夢は18歳です。

第二十三話 博麗黒夢の悩み

博麗神社は、いつもの日常があった。

それは、黒夢自身が望んでいるはずのものなのだ。

そして黒夢は今博麗神社の中で座禅をして目をつぶっていた。

その黒夢の周りには妙な気が漂っていた。

これは、神気。

神が持っている気のことである。

神気は霊気や妖気などとは比べ物にならないほどのエネルギーがあり、それは神なら信仰が増えるたびに増幅していく。

そんな神気がなぜ人間である黒夢の周りに浮いてるかというところ、黒夢はある特訓をしているからである。

それは、神を身に宿すこと。

それを知ったのは数ヶ月前のことである。

数年前にあった、鬼ノ異変。

その後もさまざまな異変を解決してきた黒夢だが、ある問題に悩まされていた。

それは、力の不足。

いくら人間にしては破格の霊気を持ち、妖怪とも対等に戦えるとしても・・・やはり力が足りないということは身をもって知っている。

それに封印をとりて何とか倒せる大妖怪と戦った後だとしばらくは博麗の神主としては働けなくなってしまう。

なので黒夢は、それを補える戦い方を探していた。

そういうことを探しているとき、一冊の書物を見つけた。

それは、月面戦争の記述。

その中で月の民の中でも破格の強さを持っている、依姫の記述だった。

彼女は戦いるときに八百万の神を身に宿して戦うことができるらしい。

黒夢はできるかどうか試してみることにした。

安部清明が残した書物の中にそういう書物があったのを思い出した黒夢はそれを取り出して読むのはじめた。

技を札で発動させるという見本にしたのも、この安部清明の本だった。

黒夢はそれから、神を身に宿す修行を博麗の神主としての仕事の合間を縫ってしている。

今の状態だと、神自身の力を借りることはできないが神気だけなら借りることができる。

もちろん、それなりの代価を払っているが。

それは・・・霊気。

黒夢が使った力の分だけ霊気をその神が受け取る。

それはつまり等価交換。

神はなにもかもに平等に接する、だから普通人に肩入れすることは無い。

力を借り受けることでも同じ、その人に加担することは無い。

だから加担するときには代価を払ってもらおう。

たとえるなら信仰、絶対的な服従・・・そして、その命のしるしでもある命。

とは言っても、神の気まぐれによっては等価交換無しでも面白そう

だったら力を貸してくれる。

・・・いや、それも面白いということ等を等価交換で出しているだけなのかもしれない。

「・・・ま、もう少し修行しないとな」

黒夢はそう言うと神を宿すのをやめて靈氣に封印をかけた。

流石に神を宿すとなると封印で漏れでてる靈氣だけじゃ足りないし神にも失礼だ。

しかし、普通なら前の異変のように靈氣の反動が来る。

だが、なぜか神を宿した後はゆっくりと靈氣が回復するため反動はそこまで無いようだ。

おそらく神の力があまりに大きすぎたのか・・・もしくは神がそういうところを考慮してるだけなのか。

とにかく、神を宿す際には封印をといても問題は無い。

「黒夢〜！」

そんな時、誰かが博麗神社にやってきた。

黒夢はその声を聞くと神社の一室から出て行き庭の方に向かった。

そこには、金髪の髪を揺らした・・・少女から女性になった佳奈美が立っていた。

・・・佳奈美は、最近魔法使いになるためにある魔法の研究をしている。

それは、『捨虫の魔法』。

つまり人間の寿命を超えて、年を取らなくなる。

更には食事をしなくてもよくなる。

実際のところ、佳奈美は今の状態だとその魔法を使うのはそこまで難しくは無いだろう（つまりそれだけ魔法の才能があるということだが）。

だが、これは黒夢の予想だが・・・佳奈美は魔法使いになることを悩んでいる。

真に魔法使いになるということは、黒夢と同じ時を歩めなくなる。

佳奈美はそんな思いがあつてまだ、探すことにとどめている。

「・・・俺のことを気にしないで、なってくれればいい。それに、あいつの夢なら止める理由も無いしな」

黒夢はそんな風に思いながら佳奈美を見る。

その姿を見ると昔よりも大人になったなと思う。

とは言っても、二人ともとくに婚期（今の時代だと14辺りが大人のようなもので17、18だと婚期を逃しているようなもの）は

逃しているのだが。

「佳奈美、今から晩御飯でも作るが食べるか？」

黒夢がそう聞くと佳奈美は神社の中に入ってきた。

「今回は私が作るよ、食べさせてくれるならなおさらね」

佳奈美はそう言っていると神社の奥の部屋に向かった。

佳奈美が手を叩くとそこからエプロンが出てきた。

黒夢はその様子を見ながら魔法ってすごいなと思っている。

佳奈美はエプロンをつけると晩飯の支度を始めた。

黒夢はそれを机にひじを立てながら見ている。

しばらくそうしていると、黒夢はあることを思った。

「（なんか・・・このようすって）夫婦みたいだな」

黒夢がそう言っていると味噌汁の味見をしていた佳奈美が咳き込んだ。

佳奈美は少し顔を赤らめると、晩飯の準備を再開した。

黒夢はなぜ咳き込んだのかわからなかったが、とりあえず暇なので神を宿しやすくするために清明の書いた書物を読むことにした。

しばらくすると、晩飯ができた。

そして今は食べ終わった後。

佳奈美は今日、博麗神社に泊まるといつていたので博麗神社に泊まることになった。

そして、辺りが暗くなり寝静まったころ。

黒夢は一人、縁側でお酒を飲んでいた。

佳奈美は奥の部屋で寝ている。

「うーん・・・わかってるんだけどなあ」

黒夢はわかっている。

佳奈美や華扇たちが自分に恋愛感情を向けていることを。

しかし、それに・・・答えられるほど自分は器用ではない。

それに、黒夢は自分を・・・幻想郷の法と思っている。

他の妖怪や人間達もそう思っているだろう。

黒夢は幻想郷の中でも、中立に妖怪と人間を裁く。

それが・・・のちに受け継がれる博麗の宿命。

その中でも、黒夢は歴代の中でも根強く最強の博麗として君臨することとなる。

そして、それ以外にも理由がある。

黒夢は佳奈美たちが見ていないときに、たくさんの妖怪を消したり・・・人間を消したりしている。

博麗の神主は、多くのことだと人間の味方である。

しかし、幻想郷の均一を守る。

それこそが博麗の神主としての真の仕事である。

例えば、人間が妖精や妖怪を必要以上に殺そうとする。（人里には黒夢程強くないが妖怪退治の専門の人物も住んでいる）

そのときに来るのが、博麗の神主である黒夢。

そのとき、黒夢はまず話し合いをしようとする。

妖怪と人間の均一を守るには、ある程度妖怪が人間を食らい・・・ある程度人間が妖怪を退治しなければならぬ。

そういつて聞かないやつは・・・少ないがいるときはいる。

それはよほどの偽善者か・・・外の世界（このときはまだ博麗大結

界が無いので表現的にはおかしいが）から来た人物だろう。

そして、聞かなかったときは黒夢が倒す。

そして倒してそうするように命令する。

ここまできて聞かない場合は・・・始末する。

これを行ったのは・・・数回。

数回、それは人間である黒夢には十分大きすぎる負担だった。

それを、黒夢はみんなにはばれないようにしている。

・・・気づいていて気づかない不利をしているだけかもしれないが。

「ま、自分で望んだことだから後悔する気は無いがな」

そういうと、黒夢は再び酒に口をつけた。

第二十三話 博麗黒夢の悩み（後書き）

一応日常編。

黒夢の博麗としての心情を語りました。

博麗は周りから見れば強くてうらやましい、恐ろしいなど思われますが裏ではうやまわれることはしていないということです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778t/>

東方神主伝

2011年11月16日10時43分発行